

---

power in the magic world ~ ~ **超能力者魔法の世界へ** ~ ~

蓮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

a person with preternatural power in the magic world ～ 超能力者魔法の世界へ ～

### 【Nコード】

N0404K

### 【作者名】

蓮

### 【あらすじ】

超能力者が外国人並に親しみやすくなった世界、そんな世界の住人霧山裕詫は世界に1人しかいない四重能力者、そんな彼が目覚めるとそこは天界で目の前に神様がいてさらに異世界に飛ばされて……超能力物なのに超能力者との戦い一切ナシ！愛？と涙？の冒険ファンタジー。

## プロローグ：神様のポケ！（前書き）

ども唄と申します。話の長さはその時の気分変わります。頑張つてマメに投稿するのでよろしくお願いします。

## プロローグ：神様のボケ！

「ここ何処？」

僕は霧山裕詮きりやまゆうた少し特殊な中二+超能力者だ。で、ほんとにここ何処？僕は昨日自分の家で寝たはずなんだけど……目の前に俺より少し年上っぽい女がいるだけで他には何も無いんだけど。

「やあ、少年」

「……………誰？」

「うゝゝん答え辛いなゝゝ強いて言うなら……神様かな、そしてここは天界です」

「携帯携帯……あつてもここからでも119番に電波届くかな？」

「違う違う私本当に神様だから……と言うか君だって超能力者なんだから神様位信じようよ」

そうだけど……冒頭でも言ったけど僕は超能力者だ。と言ってもそれは僕達の世界ではそんなに驚くことじゃない。まあ、それでも一つの学校に2、3人居るか、居ないかぐらい珍しいんだけど。

「で？その自称神様が僕に何の用で？」

「単刀直入に言うと、別世界にいつてもらいます」

「そこで何をしろと？」

「素直に納得してくれたね」

「このパターンは断つても無理矢理行かされるでしょ？」

「うん、そうだけど」

「そうだったら、目的聞くの忘れてた〜オチを防ぐためにも先に聞いておこうと思って」

「そうか、まあ簡単だよ……魔王倒すの」

「また随分とアツサリした内容で……で、何で自分で行かないの？あと、何か能力とかくれる？」

「厚かましいね…私が行かない理由は神様だから世界にあんまり干渉しちゃいけないの、あと何も与げないよ」

……はあ？

「何で？」

「いやさ、これから行く世界では魔法はあっても超能力はないの、しかも君<sup>フォーススキル</sup>四重能力者でランクAだし、さらにまだ隠し能力あるし、あっちだと人間は運動神経があっちの住人よりかなり優れてるし、こっただけありやもう良いでしょ？あと、あっちであんまり超能力者ってバレないようにね」

説明すると、<sup>フォーススキル</sup>四重能力者は世界で僕一人しかいないらしい、と言うか二つ以上能力をもってる人自体僕しかいないらしい。あと、ラン

クって言うのは能力S〜Eまでの五つにランク付けされてて、Aランクはそのなかで上から2番目なので結構凄い。

「つまり、都合が良いから僕がえられたわけね」

「正解」

「不幸だな僕……………ぐずん（涙）」

「まあ、そんなこと言わずにさ、ステキな出会いを用意してあげたからさ」

「ステキナデアイ？」

「じゃあ行つてらっしゃい」

「えーちょーちょっと待っ」

自称神様が言った瞬間、僕の意識は闇へ沈んでいった。

ブログ：神様のポケ！（後書き）

次回は3月2日に投稿します。出来れば感想お願いします。

## 第一話：ステキナデアイ（前書き）

とりあえず、ゴメンナサイ。3月2日に次話を投稿するとか言っときながらプロローグを投稿したその日に1話完成しちゃいました。と、言うことで、a person with preternatural power in the magic world  
〜超能力者魔法の世界へ〜第一話をお楽しみください。

## 第一話：ステキナデアイ

「…丈夫……か？…大……ですか？」

（誰？）

誰かの声が聞こえた。

「大丈夫ですか？」

目を開けると、目の前に緑眼青髪セミロングの超美少女がそこにいた。彼女は必死に僕に呼び掛けている。

「あ、大丈夫だよ」

「よかった、目を覚まさないから魔物に襲われたのかと思いましたよ」

魔物って…RPGじゃあるまいし………あつ…自称神様にそんな世界に飛ばされたんだっただけ？。

起き上がり、辺りを見回すとここは林道のご真ん中だった。周りには木と彼女の物っぱい大きな荷物ぐらいいしかなかった。

「え〜つと、君は誰？」

「私はリリアといいます」

「僕は霧山裕詫」  
きりやまゆうた

「キリヤマ？ユウタ？」

リリアは何故か首を傾げている。

「どうしたの？リリア」

「何で名前が二つあるんですか？」

「ああ、（この世界には苗字がないのか）裕詫が名前で霧山は苗字っていうんだよ」

「みょうじ？」

……せめて心の中で叫ばせて、カワイイ！めつつつつちやカワイイ！ひらがな表記最高！

「まあ、裕詫って呼んでね」

「はい！……で、何でこんな所で寝てたんですか？」

「え……えっと…あの」

と、言うことでここまでの経緯を説明した。（超能力とか、自称神様のところは誤魔化して）すると、何かリリアが泣きだした。

「えっ！な…何で泣いてるの？」

「だっ…だっ…ぐずん…私たちの世界のために、ヒック…こんな所まで来て……」

(話を大きくしすぎたかな?)

「だから泣かないでって…そういう訳だからこの世界について教えてよ、ね?」

「グズン、はい」

やっと泣きやんでくれたリリアはこの世界について話してくれた。それをまとめると、

- 1、この世界には魔法がある(科学はない)
- 2、この世界は勢力争いのものがまだ続いている
- 3、この世界の形は僕の世界と一緒に(世界地図をみただけだけど)
- 4、魔王はカンテルガ王国(ロシア+ヨーロッパの大半)の王で、現在絶賛侵略中らしい
- 5、ここはテスビーグ王国(中国の場所にある)らしい
- 6、そのテスビーグ王国とカンテルガ王国のちょうど境目にあるハース王国(モンゴル)がカンテルガ王国侵略され始めた
- 7、リリアは自分の国の命令で、ハース王国と同盟を結ぶために今ハース王国に向かっている

と、言うことになる。

「何で同盟なんか結ぶの？」

「そうしないと、戦いに参加出来ないんです」

「じゃあ、なんでリリアはそんな格好してるの？」

「？」

今、リリアの格好をみたらなんか凄い格好をしていた。その格好と言うのが……Tシャツとワンピースを繋げた布みたいなの1枚だけだった。

「何でそんな……あの……薄着なの？」

「あつ……これは妖精フェアリーの中では一般的な服なんです」

え？

「今何て言った？」

「だから、妖精フェアリーの「妖精フェアリー!」はい、そうですけど」

「マジで?」

「はい」

キョトンとしているリリアにグツとくる物を抑えながらリリアにさらに質問する。

「フェアリーって妖精!？」

「それがどうしたんですか？……あつ！そう言えばユウタ君の種族は何ですか？」

「僕達の世界だと妖精はおとぎ話の中にしか出てこないんだよ、あと僕は人間だよ」

「人間！！！」

「？」

(リリアの目がキラキラしてるのは気のせいかな？)

「人間なんですよね！ユウタ君は！！」

「うん、そうだけど」

「やったーーーー！！！！やっぱり実在したんだ！！人間！！！！！！」  
両手を上げて喜びをアピールしている。

「この世界だと人間は伝説上の生き物だったりする？」

「はい！」

ガールルルルル

「でき、リリアの後ろにいる半オオカミみたいな生物は何？」

「え？」

スウーと言う音が聞こえて来そうなほど勢い良くリリアの顔が青ざめていった。そして、ゆっくり後ろを振り向き、後ろで臨戦態勢の半オオカミを見て、

「逃げましょう!」

逃げた。荷物と僕を両手で持って逃げた。

そして、いきなり逃走劇が始まった。

## 第一話：ステキナデアイ（後書き）

今回、リリアの登場とこの世界の紹介しかできませんでした。次こそは戦わせたいと思っていますので、次回をお楽しみに

## 第二話・半才オカミの魔物（前書き）

またですが、すみません戦うとか言っておいて今回は前ぶりだけで終わっちゃいました。

## 第二話：半才オカミの魔物

逃げていた。林道の中をひたすら逃げていた。何からかと言うと半才オカミの魔物からだ。

(にしても広いな、この森一体どこまであるんだろう?)

そして、隣では妖精の美少女リリアがリュックの中の何かを必死に探している。一方の半才オカミ魔物はグルグルルルとかガアアアアとか恐ろしい雄たけびを上げながら追ってくる。僕らとの差が全然縮まらないのが不思議なぐらいだ。

「あつた！」

ついにリリアがリュックから何かを取り出した。野球のボールみたいな球だ。

「ユウタ君！目を閉じて！！」

言われたとおりに目を閉じた。(目を閉じて走るのはメチャクチャ怖かった)すると目を閉じていても分かる位に激しい閃光が瞬いた。思わず足を止めてしまうと、

グガアアアアアアアアと言う雄たけびの後リリアの声が聞こえてきた。

「もう開けていいですよ」

ゆっくりと両目を開くと、隣にリリアが佇んでいた。そして、その目線の先には両手一(それとも両前足?)で両目と塞いで地面に転



とか何とかやっているると半オオカミが起き上がり始めた。

「早く！」

「あ……うん……分かった！」

パツと手を握り呪文を唱える。

「ハーマナイズ」

瞬間、さっきのほどでは無いけれども激しい閃光が瞬き、次の瞬間にはリリアはそこに居なかった。でも僕の体には何の変化もなく、半オオカミは一切ひるんでいない。

（し……失敗？）

**第二話・半才オカミの魔物（後書き）**

次こそは、次こそは戦いますんで……………

第三話：人間は凄かった（前書き）

はい、やっと戦闘です。

### 第三話：人間は凄かった

『成功ですよ』

頭の中に直接リリアの声が聞こえてきた。

(……………良かった……………何の変化もないから失敗したかと思った)

『自分では見えませんが左目は緑色になっているんですよ』

(そうなんだ。で…僕はどうすればいいの、魔法とか無理だけど……………)

『魔法は私が呪文を唱えますんで…それまで時間を稼いでください』

(え?)

『大丈夫です、一体化は肉体強化も同時に出来ているんで』

とか何とか言っていると、いつの間にか半オオカミが両手一(それとも両前足?)と両足の爪を出して、グルルルルとか言う雄たけびを上げて臨戦態勢に入っていた。

「ガアアアアアアア」

と言う雄たけびと共に半オオカミが突進してきた。物凄いスピードだったけど直進するだけの単調な突進だったので、ちよつと横に動いたら簡単に避けれた。

そのまま、半オオカミは木に突撃した。いくら真っ直ぐだからと言



.....  
(何も起こらないんだけど)

『起こりませんね、まさか……魔力足りない?』

(そつなの?)

『魔法が使えないんですから、魔力が足りない以外に考えられませ  
ん』

(クソ!)

そして、また攻撃をひたすら避ける。もうこのスピードにも慣れて  
きて余裕も出来てきたけど。

(どうする?)

『殴り倒します?』

(……………グロいけど採用)

と、言うことで半オオカミがまた大振りをした際に後頭部を思いっ  
きりブン殴ってみた。

「グ……………ガアアア……………」

半オオカミは僕が殴った勢いのまま地面に叩きつけられ、そのまま  
動かなくなった。

(死んだ?)

一応確認してみたけど……やっぱり死んでいた。

『人間………凄いですね』

(僕も人間がそこまでとは思ってなかった………一体化戻ろうか、どうしたら良い?)

『アウトサイドって唱えてくれればいいです』

「アウトサイド」

僕が唱えた瞬間一体化の時と同じ閃光が瞬き、隣にリリアが立っていた。

「どっつするのこれ？」

半才オカミを指差して聞くと

「町に持っていきます」

と予想外の答えが返ってきた。

「何で？」

「この魔物位ジールケルの強力な魔物は町のギルドに持っていくと換金してくれるんです」

「いくら位？」

「ジールグルだと、4万ゼル位ですかね」

「ゼルってどれ位の価値？」

「100ゼルでリング1つ位の価値です」

つまりゼルは円と大体同じ位の価値らしい

「で、どうするんですか？もう暗くなってきましたけど？」

確かに空を見るともう暗くなってきた。でもそんなこと聞かれても分からないので

「どっしたら良いと思っ？」

聞き返した。

「私は今日はここで野宿するけど？」

「お願いします」

「はい」

と言うことでリリアのお言葉に甘えて一緒に野宿させてもらう事になった。

**第三話：人間は凄かった（後書き）**

次は3月6日に投稿します。

#### 第四話・地獄の料理と副作用（前書き）

また、次の戦いのための前置きの回です

#### 第四話：地獄の料理と副作用

そしてその夜、森の中にテントを立てて寝る準備は整った。あとは夕食だ。その夕食はカレーらしいが、

「　　」

リリアが作っているのは何？カレーのルーにニンジン、じゃがいも、玉ねぎ、あわって牛肉をそのまま放りこんで鍋で煮ているんだけど。

「ねえ？リリア？それは何て言う料理なの？」

「カレーですよ」

「……そうか……ちょっと変わって」

「はい」

これを食べたなら何だか取り返しのつかない事になりそうなので、僕が変わってカレーを作り始める。それでも前の世界では家庭科で5を取るほどの実力だ。

とりあえず直接放り込まれていた具材たちを鍋《地獄》から助け出し、細かく切り刻みとろ火で煮詰めた。

そして、そのカレーを食べたリリアの感想は

「…おいしいです」

好評だった。

「良かった、口に合って」

「はい……ゴホッゴホッ」

突然リリアの顔色が悪くなり、咳をして………血を吐いた。

「どうしたの？大丈夫？」

リリアの後ろに立って背中を擦った。すると少し楽になった用で少しだけ顔色が良くなっている。

「もう……大丈夫です……これは一体化の副作用の様な物なんです」

「副作用？」

「はい、ある条件を満たさないと一体化の後に体にダメージがやっ  
てきます」

それを聞いて頭に血が昇った。

「何でそれを言わなかったんだ！」

「ユウタ君がそんな性格だからですよ」

「!？」

「あの時、副作用の事を話したら絶対に一体化してくれなかったで  
しょう？最悪、勝てないと分かっているも1人戦ったでしょ？現に  
今だってそのことで怒ってくれたじゃないですか」

何も言えなかった。

その後は二人とも何も言わず無言でしゃがみ込んでいた。

その沈黙を破ったのは僕でもリリアでもなく、突然の来客だった。

「ガアアアアアアアアア」

その雄たけびで僕らは同時に立ちあがった。

「「ジールグル！」」

「グガアアアアアアアア」

「グガアアアアアアアア」

「グガアアアアアアアア」

音が反射するから色んな方向から雄たけびが聞こえてきて、さらに辺りが暗いのでジールグルの居場所が全くつかめない。

「一体化してください！」

リリアが言った。けど……

「そんな状態で一体化したらどうなるんだよ!!」

さっきよりは大分マシになったけど、まだ足もフラついているし顔色も悪い。

「でも！」

「ガアアアアアアアアア」

いつの間にか、声が近くからになっている。

「クソ！」

「グルルルガアアアアアアアア」

ひとときわ大きい雄たけびと共にジールグルが飛び出してきた。爪の横なぎをスレスレで避ける。でもジールグルの狙いが僕じゃないことに気づき叫ぶ。

「リリア！避ける！！」

「キャアアアアアア」

リリアはジールグルの攻撃を避けきれず、爪がリリアの肩をかすめた。鮮血が飛び散り、リリアが肩を押さえてしゃがみ込んだ。ジールグルはそのままの勢いで森を背にリリアと間合いを取った。すると、その背の森から更に2匹ジールグルが出てきた。

「ユウタ君、早く一体化を」

「ダメだ！」

「でも、そうしないと」

リリアは今にも泣きそうな顔をしている。

（なあ自称神、超能力を使っちゃいけないんじゃない、超能力がバレちゃいけないんだろ……じゃあ僕は超能力を使つよ……リア《友達》を守るために！）

リアに背を向け、目に一つ目の超能力発動の証である赤い星を浮かび上がらせ右手を握りしめた。

#### 第四話：地獄の料理と副作用（後書き）

次、ジールグル達と戦います。

第五話：火炎操作へプロミネンスコントロール（前書き）

やっと、主人公の能力が一つ登場します。

## 第五話：火炎操作へプロミネンスコントロール

前回超能力を使うことを決意した僕だけど、そのまま超能力を使うとバテて面倒なことになりそうなのでそれが超能力だと思わせない使い方をしてみる事にした。

「リリア下がってて、巻き込みたくないから」

「でも！ジールグル相手に生身の体で挑むだなんて無茶です！！」

「大丈夫……心配しないで、それにリリアを守るために戦うんだからリリアを巻き込んだら意味がないでしょ」

渋々リリアは頷いてで僕の中から10メートル位下がった所にあつた大木の後ろまで非難した。あくまでも逃げたりはしないと意思表示のつもりなのかなと思う。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア」

「ガアアアアアアアアアアアアアアア」

「ガアアアアアアアアアアアアアアア」

「ガアアアアアアアアアアアアアアア」

4匹のジールグルが同時に雄たけびを上げた。

(ん？4匹？)

そう、4匹いた。つまり、さっきまでジールグルはご丁寧に話が終  
わるのを待ってたんじゃなくて、もう一匹仲間を呼んでいたらしい。  
(まあいいか3匹も4匹も同じようなもんだし)

「世界を構築する五代元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

とりあえずジールグルが襲ってくる前に、真っ先に思い浮かんだ発  
火的喫煙神父の魔○狩りの王を唱えてみる。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。  
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸  
なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、わが身を喰らいて力と  
為せ。イノケン○ウス!!!」

呪文を唱え終わると同時に僕の能力の1つ、フロミネンスコントロール 火炎操作をつかって炎  
を発生させ、形を変え、2メートルにも及ぶ巨大な炎の巨人を生み  
出した。

「え？」

そんなマヌケな声を出したのはリリアだ。

「……グルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウウウウウウ」

ジールグル達はキレイに四匹そろって威嚇してきた。

(弱いなんとかほど良く吠えるってね)

そして、僕はジールグル達に向かって走り出した。何故イノケン○ウスだけを動かさないかというと、僕の火炎操作は右手で操る炎にプロミネンスコントロール触れていないと使用できないからだ。

「行け！イノケン○ウス！！」

速攻で接近し、イノケン○ウスの手でジールグル達を薙ぎ払った。

「ガアアアアアアア！！！！」

3体は間一髪で避けたけど残りの1体はイノケン○ウスの攻撃で火だるまになり、地面をしばらく転がった後動かなくなった。（本物の様に3000°の高温にはならない）

「……グルウウウウウウ！！！！」

仲間を殺られたからか、ジールグル達は本気ギレの雄たけびを上げた。

「隙だらけ」

叫んでいるうちに2体を火だるまにして、あと1体。

「ガアアアアアア」

「つとー！！」

高速突進をギリギリで避けつつイノケン○ウスで攻撃する。

「ガアア！！」





**第五話：火炎操作へプロミネンスコントロール（後書き）**

次は、3月9日に投稿します。

第六話・返ってきた悪夢とノリノリのハンター達（前書き）

サブタイトル長いですね。題名も長いのに……今調子に乗ってもう一つ小説を書こうか思っています。

## 第六話：返ってきた悪夢とノリノリのハンター達

朝、そう朝だ。昨夜からリリアに質問攻めされて疲れが全然抜けていないけど、朝だ。異世界で初めて朝だ。

「朝ですよ〜ユウタ君」

「……………朝だね」

何度も言っけど朝だ。今日からついに魔王を倒す旅の始まりのはずなんだけど、目の前にはポイズン○ツキングも真っ青な…何か…ドクドクしい……………料理？を作っているリリア。僕の胃袋に恨みでもあるのだろうか？

「出来ましたよ」

そんな事を思っていると料理《食物兵器》が出来あがってしまったらしく、リリアがニッコニコしながら料理を持ってきた。

「うん？」

「さあ、私のあ……………愛……………料理を食べてみてください！」

何かリリアの顔が真っ赤っ赤になっていたけど、目の前の料理をどうするかで頭がいっぱいでそこまで気が回らなかった。

「い……………いただきます」

意を決して料理を一口食べると意外に……………と言うラッキーな展開



味音痴じゃなくて本当に良かった。

「作り直します」

「いいよ、僕が作るから……泊めてもらったお礼」

と言うことで、家庭科5の実力再び。

「やっぱり、美味しいです」

「それは良かった……でさ、僕は行くアテがないからリリアについて行っていい？」

「良いですよ……ただし……えっと……あの……料理を教えてくださいー！」

「その位お安い御用だよ」

とりあえず僕はこの世界でリリア以外に知り合いがないし、お金もないのでリリアについていくしかなかったんですけど、リリアが料理下手で良かった。

「で、何処に行くの？」

「ギルドに行つてそのジールグル達を換金します」

そういえば昨日、つまり異世界1日目にして5匹も魔物を倒したんだった。しかも、そいつらは1匹で4万ゼル（日本円で4万円位）になるらしいから、20万ゼル（20万円）になる。

(超金持ちだな)

「じゃあ、行きましょう」

そして歩くこと約10分。僕はモ○ハンのギルドをバカでつかくしたようなギルドに居るんだけど…みなさん怖い顔しないでください。

「みろよ、ジールグルを5匹も」

とか

「あんなガキどもがジールグルを？」

とか

(みなさん、そんな注目しないで)

リアは窓口で換金してるので、僕は今一人でテーブルに座っている。するとポ○モンに出てくるスキンヘッドみたいな、羽の生えた大男が僕の前の席に座った。

「あのジールグルを殺したのはお前らか？」

(やっぱり聞いてきたか)

「え〜と…1匹は2人でやつつけて、あと4匹は僕が1人で殺りました」

「『『『『『『そんな訳あるか！』『』『』『』』」

その場に居たはぼ全員が同時に叫んだ。

「お前みたいながきがジールグルを4匹も倒せる訳ないだろ！」

（だよね〜、でも事実だし）

「事実ですし……」

「そんなに言い張るなら俺と決闘しやがれ！」

（急展開！？それに、そんなに言い張ってないんですけど）

「『『『『『『決闘！、決闘、決闘！』『』『』『』』」

（みなさんノリノリ！？）

と、言うことで決闘させられる事になった僕であった。

## 第六話・返ってきた悪夢とノリノリのハンター達（後書き）

最近、少しずつ増えていくお気に入り登録数をチェックするのが楽しみになってきました。感想とレビューも書いていただけると嬉しいです。

第七話：スキンヘッドと決闘と……（前書き）

最近だんだん暇がなくなってきたんで、投稿ペースを落として週一位にします。

第七話：スキンヘッドと決闘と……

「覚悟はいいか…ガキ？」

僕は今ギルドのコロシウムに居る。ド○ボールの天下一○闘会をイメージしてもらつと分かりやすいと思う。

ちなみに、客席は半分ぐらい埋まっっていてリリアは客席の一番前で心配そうにこつちを眺めている。

「良いけど…」

「ほう…向こうのお譲ちゃんはいいいのか？2対1でも構わねえぜ」

「大丈夫だけど…」

「そうか……………審判！」

スキンヘッドが合図すると審判っぽい半ヘビが奥から出てきて、僕とスキンヘッドに向かい合っ立つように指示をだした。

「両者、準備はよろしいですね」

「おう」

「はい」

(本当は全然良くないです！)

僕とスキンヘッドが了承すると審判は右手を高く上げて

「始め！」

と、叫んだ。

それと同時にスキンヘッドがバックステップで僕から距離を取り、ブツブツ何かを唱え始めた。

「火の化身、火竜よ。我が力となりてこの右手に宿れ！」

スキンヘッドが呪文を唱えるとスキンヘッドの右手から炎が噴き出し、全長2メートル位の竜の形になった。

「行け！火竜！！」

スキンヘッドが右手を突き出すと、炎の竜がスキンヘッドの右手を離れてこっちに向かって突進して来た。

「避けてー！ー！」

リアアが叫ぶけど、こんな巨大な竜のリーチから一瞬で逃れる事ができるほど僕の運動神経は優れていない。

（でも……魔法で作ったって炎は炎でしょ）

そう、どんな形でも、どんな温度でも、どんな作り方でも、所詮は炎だ。

プロミネンスコントロール  
火炎操作の発動の証、赤い星を浮かび上がらせ右手を突き出した。

「うにょうにょうにょ」



「別にいいよ、怪我してないし」

「あ、ありがとう……さっきまでの無礼を許してくれ……俺はブレッ  
ド・テーデン、テーデンと呼んでくれ」

「僕は霧山裕詫きじやまゆつたユウタと呼んでね」

「よろしく」

「よろしく」

スキンヘッド改めテーデンと握手を交わすと、ギャラリーから拍手  
が湧いた。

「ユウタ君、凄いですね」

拍手が止み、ギャラリーが居なくなった頃にリリアがやって来た。

「何が？」

「さっきテーデンさんが使った火竜の魔法はかなりの上級魔法です  
よ。それをあんなにアツサリと攻略しちゃうだなんて、流石ですよ」

そういえば、リリアに超能力の詳しい説明をしていなかった。

「ああ、そう言えばどうやって俺の火竜を剣に変えたんだ？」

「え~~~~っつと……秘密って事で」

「そうか」

( テーデンが詮索してこなくてよかった )

とっさに良い言い訳が思いつかなかった。

「で、ユウタとその彼女はこれからどうするんだ？ここに残るなら俺が世話しても良いぞ」

「かかかかかかかかかかかかかかかかかか彼女！！！」

「リリアは彼女じゃありません、あとここには残らないから」

怒りで顔を真っ赤にしているリリアを無視してとりあえず否定。

「そうか、残念だ」

本当にテーデンがっかりしているので、「何かあったらよろしく」とだけ言い残してギルドを出た。

そして、ここは町だ。町と言っても池袋とかよりもドラゴン〇ストに出てくる感じの町だ。

「リリアどうするの？これから？」

「まず、食糧を買いましょう。あっ、そう言えばこのお金はユウタ君のお金ですね」

リリアがさっき換金したばかりのお金を差し出してきた。

「いいよ僕、この世界の金銭感覚が分からないからリリアに預けておくよ」

「はい、分かりました」

(癒し系だな〜)

リリアの笑顔に癒されていると

「とっつ」

蹴られた。

後ろから不意打ちされた。

「ねえ、あなたがシャルマージ王国の大使？」

第七話：スキンヘッドと決闘と……（後書き）

次回、物語が進みます。

第八話：ある意味天才的料理（前書き）

今回、新キャラ出ます。

## 第八話：ある意味天才的料理

不意打ちの犯人は、僕達と同じ位の年の少女だった。リリアに質問をしたみたいだ。

「キックに対する謝罪はないんですか？」

リリアの笑顔が今までにないほど怖い。

「いいじゃない、そんな護衛の魔族」

「違う、僕は一般人だよ」

「!!!!!!」

少女は物凄くびっくりしている。

(何で？何もおかしい事は言っていないよな。一般人としか……！  
………人ってカミングアウトしちゃったじゃん)

そういえばこの世界では人間はおとぎ話の中の生き物だった。

「本当に…本当に人間なの？」

最初の質問も忘れて聞いてきた。

「う…うん、人間」

「へえ、実在したんだ」

「あなたは何なんですか？」

リリアが不機嫌そうに割って入った。

「私はハース王国守備部隊第3部隊隊長サリー・シルフィードよ」

「私はシャルマージ王国大使リリア・シャルマージです」

「えっと…僕は日本国中学2年生霧山裕詫きじやまゆつた」

僕のはさておき、それぞれの自己紹介が終わった。

「私はこれからハース王国までリリアさんの護衛を務めさせてもらいます」

「よろしくお願いします」

そして、僕達は食料だけを購入して町を出た。

「そう言えば、何でサリーの種族は何なの？」

見たところ、テーデンのように羽が生えていたりはない様だ  
けど。

「エルフよ」

「エルフ？」

「精霊って事ですよ」

「そうなんだ」

そんな会話をしながら、山を昇っていると

「ブガアアアアアア」

イノシシ+サイみたいな魔物が現れた。

「大地の聖霊よ、森の樹木よ、我が杖にその力を宿せ」

イノシシ+サイの魔物が何かする前にサリーが僕らの前に出て、いつの間にか取りだした杖に光を集めて杖を振るった。

「ギャイイイイイイイ」

衝撃波と言うより、距離を無視した一撃のように見えた一撃がイノシシ+サイにヒットし、そのまま吹き飛んで行った。

「強いねサリー」

「これでも、隊長なんで」

サリーの実力が分かった所で、ようやくハース王国の王城らしい城が見えてきた。と言っても山のほぼ頂上近くからの景色なので距離は結構ある。

「ユウタ、あなたは 何なの？」

「何なの？って僕は僕だけど」

「そうじゃなくて位置よ、リアさんの護衛扱いでいいの？それとも一般魔族扱い？」

「そういえば、どうなの？」

「さあ、分かりません」

「……………」 x 3

3人でしばらく悩んだ末僕はリアの特別護衛扱いとなり、その夜僕らは山で野宿する事になった。

僕は今プロの料理人が作ったの？と質問したくなるほど素晴らしい料理を前にしている。

僕にはそんな技術はないし、もちろんリアにも不可能。つまりこの素晴らしい料理をつくったのは……

「どっ？」

サリーだ。

凄い自信満々にこっちを見ている。

「美味しそう」

「ですね」

そして、一口食べる。

「……………味がしない」

「無味ですね」

「え？」

「一切味がしなかった。」

（サリーの料理の腕は……………？）

美味しくも不味くもない料理を食べ、僕は眠りに就いた。

第八話・ある意味天才的料理（後書き）

まだまだ、ハース王国への道は遠いです。

第九話：また現れた疫病神（前書き）

今回はあいつがやってきます。

## 第九話：また現れた疫病神

「やあ、少年」

「……………」

デジャブ？

ここは、前にも来た天界一（by自称神）だ。  
そして、目の前には自称神がいる。

「だ・か・ら・自称は余計だつて」

「携帯携帯……………なあ、自称神？こつて電波届く？」

「何処に？」

「もちろん病院」

と、若干デジャブなトークをしていると

「それは置いといて」

無理矢理話の軌道に戻された。

「何で呼んだの？」

「まあ、説明をしようかなって思って」

「何の？」

「不思議に思わなかった？言語とかさ？」

そういえば

「ホンヤク○ニヤク的な感じにしといたから……ちなみに、人間は伝説の生き物になってるから」

「それはリリアに聞いた」

「そうなんだ、でね、魔王ってのは「それも聞いた」じゃあ君を飛ばした世界には魔族とか魔獣が「もうやっつけた」……じゃあ、君さ、もう気づいてる？」

「何に？」

（あゝこの子乙女の純情に気付かないタイプの子か……面白い！）

何故か、自称神の顔は物凄く楽しそうに笑っていた。

「何でもない」

「で、他には？」

「君にせめてもの報酬を、まあ可哀そうだから何かあげるってこと」

「グミ！」

「即答だね」

僕の大好物はグミだ。「お前の主食はグミか！」と父親にツッコミを入れられた事もあるほど、グミを愛している。

「じゃあ君の部屋の物と一緒にリュックに入れておくから  
は？」

「ストップ！僕の部屋の物はおいといてリュックって！？僕リュック持っていないし、まずリュックにはそんなに入らないから！」

「大丈夫だよ四次元 ケットの感じにしとくから」

「重さは？」

「ド エモンがそんな重いもの腹に付けて歩いていると思ってる？」

「そう言えば……」

そんな重そうには見えないけど………

「じゃあ、これを励みに頑張っつてね」

「え、ちよっ待っ！」

そして、僕の意識は闇に沈んでいった。

第九話：また現れた疫病神（後書き）

次回は物語が進みます。

第十話（前編）：色々デカい国（前書き）

今回は前後編です。

第十話（前編）：色々デカイ国

「う〜ん」

朝、僕は美味しそうな匂いで目が覚めた。

「おはようございます」

「おはよう」

「う〜ん、おはよう」

二人は朝が早いみたいだ。

「何してるの」

「見た通り朝ご飯を作っているんです」

「てか、護衛の分際で起きるのが遅い！」

「……」

怒られた。それはさて置き、言うか料理美味しそ〜

そして、今僕の目の前には料理が置いてある。もちろんリアの料理《殺人兵器》ではなく、サリーの作った無味料理だ。

（栄養は取れているんだろうか？）

素朴な疑問を抱きつつ朝ごはんを食べた。

「じゃあ、行こうか」

朝ごはんも食べたし、準備は完了だ。

「……………」

「……………」

「？」

何故か二人が僕を凝視している。

「どうしたの？」

「そのリュック……………」

サリーが僕のリュックを指差した。そりゃ、昨日までなかった物があるんだから驚くだろう。

「あつ、それは……………」

(……………そうだった、自称神のことは秘密だった)

言いかけた所でその事に気付いた。

「ぼつ僕の能力で……………」

「そう」

「そうなんですか」

(なんとか誤魔化せた)

二人が追及して来ないことに安堵していると

「で、中身は何が入っているんですか」

忘れていた。

「色々…」

「見せて」

「私も興味あります……………人間の持ち物に！ですよ！！」

二人とも僕の世界の物に興味があるみたいだ。特にリリアは叫ぶほど。

「じゃあ、これをあげるよ」

「「？」」

僕はリュックからグミを取り出した。自称神は結構グミを入れてくれていた(2か月分位)。

「どうぞ」

「自分で食べるから」



二人の反応がこれだからその他の国はどんなのか逆に心配になってきた。

「で、どうやって入るの？」

「防衛班の何方かに結界を解いてもらわないといけません」

たしかに、この結界は簡単には破れそうにない。

「私とその隊長ですしね」

「……そういえば」

「まさか…二人とも忘れての？」

僕らは二人同時に頷いた。

そして、サリーが何処からともなくカギを取り出して結界に突き刺した。カギは弾かれる事もなく結界の中に入っていき、何かガチャガチャしたあと結界から出てきた。

『ボワン』と言う音と共に高さ2メートル横幅1メートル位の長方形の扉が出来た。

「じゃあ、入ろうか」

「うん」

「はい」

ハース王国の第一印象は

「城デカ！」

だった。

「ハース王国は面積は小さいですが王城は巨大ですからね」

「ねえ、リリツチ今の若干皮肉入ってない？」

そういえば、旅の間にリリアとサリーは仲良くなっていた。ちなみに、僕に対する話し方も柔らかくなった。

「とりあえず王城に行こうか」

「そうだね」

「そうしましょう」

そして、王城の前

「僕の言うことは分かってるよね？」

「ですよね」

「「城デカ！」」

「だよね」

「正解」

そんなこんなで入城し、現在王の間の前だ。

《後編へ続く》

第十話（前編）：色々デカい国（後書き）

前回の後書で物語が進むとか言いましたが、今気づけばあんまり進みませんでした。次回辺りで戦わせようと思っています。

第十話（後編）：衝撃の事実と『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル』

もう春休みが終わってしまい、受験生になってしまいました。テスト前とかは投稿が遅くなるかもしれませんが、これからもよろしくお願ひします。

第十話（後編）：衝撃の事実と『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル』

『ギイイイイイイ』と言う音と共に扉が開いた。

サリーが先頭を歩き、リリアがその後ろを歩く、そして僕はリリアの護衛扱いなのでリリアのすぐにそばを歩くまる。

その部屋には王様の風格が漂う王様が座っていて、その横には気品漂う王妃様が座っていた。そして、その周りにはこれまた隊長の風格漂う隊長のみなさん。

「ようこそハース王国へ私はハース王国国王ジャルア・ハースだ」

王様がにこやかに挨拶をした。

「シャルマージ王国第二王女リリア・シャルマージです」

「えー！」

さっと全員の視線が僕に向けられる。

「いえ…何でもないです」

全員の視線が痛かった。

そして、何やかんやで条約会議は終わった……

「ふう、緊張しました」

リリアは一仕事終えた感MAXな表情だ。

「リリッチに言うの慣れてるでしょ」

そこで2人の話を遮り、さっきできなかった質問をする。

「で、リリアってお姫様なの？」

「はい、そうですが？」

アツサリとリリアは認めた。

「知らなかったんだけど」

「あれ？言ってませんでしたっけ？」

「うん」

そして、二人とも見つめ合いながら暫くの沈黙。

「……………」

「えい！」

「痛！」

サリーに殴られた。

「何するの」

「リリッチを見て」

もう一度リリアを見つめる。

「……………気絶してる？」

「何で分かる？」

「王様の前で緊張したから？」

「えい！」

また殴られた。しかも今度は杖で。

「何で殴るの？」

「全乙女を代表してよ！」

「？」

その後、リリアは医務室に連れて行かれた。

だから、僕はサリーとヒマを潰すためにビルド街という通りをぶらぶらしている。なんでも、もっと疲れれると思っていたので休暇を取っていたらしい。

「今更だけどね」

「何？」

「リリッチと町のだ真ん中を2人で堂々と歩いて、全くそういうことに気がつかないあんたに言っても意味ないのは分かっているけど…」

…」

サリーは若干頬を赤らめている。

「だから何？」

「年が同じ位の男女が一緒にいると……………カップルに見えるの」

「……………そう言えば」

「（まあ、リリッチだったらそれで気絶だけど）」

「何か言った？」

「何もない」

そんな話をしながら町を歩いていると、サリーが突然足を止めた。その視線の先には一枚のポスター『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル大会！！』と書いてある。

「出たいの？」

コクリ、とサリーは頷いた。

「何で？」

「優勝賞品……………欲しくない？」

そのポスターには優勝賞品も書かれていた。

その優勝賞品は

「カエルのストラップ？」

（シヨボくない？）

「い、いいから出るよー！」

「1人で出れば？」

「タツグって書いてるでしょー！」

と、言うことで無理矢理大会に出場させられてしまった僕であった。

第十話（後編）：衝撃の事実と『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル』

次回辺りはちゃんと闘います。

## 第十一話・初戦（前書き）

すみません、投稿が遅れました。こんかいは2話投稿しますんで

## 第十一話：初戦

「…僕、何もしてないんだけど……………」

前回、サリーに無理矢理『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル大会！』に参加させられてしまった僕だったが予選は何もすることなく、サリーが速攻で敵を2人とも瞬殺していった。

「サリー、気合い入ってるね」

「入ってないわよ！あくまで修行だから！！」

いつの間にか修行になっていた。

「で、どういうルールなの？」

「ルールを知らずに参加してたの？」

「ルールも説明せずに参加させた誰かさんのせいだね」

そう、僕は一切ルールの説明をされていないのだ。大きめのスーパーボール位の大きさの変な水晶持たされてボーっとしてただけ。

「ルールは、2人共がさつき渡された水晶を割られるか、2人共が気絶するか、どちらかが降参するかすれば負け。以上よ簡単でしょ？」

「たしかに簡単だね」

そして、本戦

「始め！」

いきなりだけど本戦の1回戦が始まった。本戦はお約束のトーナメント方式で、僕らはいきなり試合だ。審判のコウモリ人間みたいなヤツが開始を告げた直後に僕を除く3人がバックステップで後ろに下がり呪文？を唱え始めた。

ちなみに、相手は両方小人のオツサン、低身長+おっさん顔が凄く醜い。全員、水晶をさつき配布されたチェーンに通して首から下げている。

「凍てつく氷よ！我が手の中で剣となれ」

「轟く雷よ！我が力となれ！」

「大地の聖霊よ、森の樹木よ、我が杖にその力を宿せ」

上から順に小人A、B、サリーだ。小人Aは氷の剣を生み出し、小人Bは手をバチバチさせ、サリーは杖に光を灯した。

「トリヤアアアアア！！」

物凄い勢いで小人Aが僕に氷の剣で斬りかかってきた。呪文を唱える前にやっつけてしまえ！的な事を考えているんだろう。

でも、超能力は魔法みたいに呪文を唱える必要はない。二つ目の能力発動の証である青い星を目に浮かび上がらせ右手で振り下ろされる氷の剣を掴んだ。

「何！」

小人Aが氷の剣をただの右手に受け止められて驚いている間に能力の説明をすると、この能力の名前は水力操作アクアコントロールと言いつつ水や水分の形や温度を操ったり、空気中の水分を使って水を発生させたりする事ができる。操作できる限界はその時の心境によって変わるが普段は大体2メートル位が限界で、プロミネンスコントロール火炎操作やその他まだ登場していない能力もそんな感じだ。

今も右手が触れている部分の氷を溶かして水にして手が切れないようにしている。

「グワアアアアア！」

僕が能力の説明をしている間にサリーが小人Bをやっつけたらしい。

「終わらすよ」

「はあ？」

氷を水に変化させバックステップで小人Aから距離を取り、氷の剣から作った水に空気中の水分で作った水を足し

「やあ〜」

小人Aにぶちまけた。

「冷た！」

キンキンに温度調節した水を被って小人Aが怯んでいる隙に近づき、

足元を凍らせた。

「僕らの勝ちで良いよね？」

「くそっ……分かったよ負けた負けた」

足元を凍らされて身動きのできない小人Aは素直に負けを認めたと、言うことで初戦突破。

第十一話：初戦（後書き）

この大会はもう少し続きます。

**第十二話：準準決勝、準決勝（前書き）**

次はきちんと19日の月曜に投稿します。

## 第十二話：準準決勝、準決勝

僕は、第二回戦まで少し時間があるので他の試合を見ることにした。

「す、凄いね」

「そう？あれが？」

僕らの目の前では電撃バチバチ閃光ピカピカの物凄い戦いが繰り広げられている。

「あんたのちよりのりよくってのはどうなの？」

「超能力は魔法みたいに呪文は必要ないけど、一人一種類しか能力を使えないから」

「魔法だつてその魔族のもつ属性の魔法しか使えないわよ」

「ホント!？」

「知らなかったの？」

「リリアが教えてるれなかったから」

「ああ見えて天然だからね」リリツチ

2人してコクコクと頷いた。

「終了！」

審判のコウモリ人間みたいなヤツが終了を告げた。

「勝者！シード・ガブリエル、ソルト・アーケチス」

勝利したのは目つきが悪くモン○ンの大剣みたいなものを持ってドラゴンっぽい尻尾を生やした、僕らと同じ位の少年と「いつひっひっひっひ」とか笑いそうな眼鏡の小オッサンだ。

「もし順調にあいつらが勝ち残ってきたら決勝で戦う事になるわね」

「ふん」

そして、僕らの2回戦。

「……………」

僕らの大戦相手は凄いいょロビョロで弱そうなゾンビ？（別に腐ってはない）だった。

「始め！」

「……………」

審判が開始を告げるが、誰も動かない。

「隙がない」

「……………そうなの？」

見たところ隙だらけで普通に殴りかけれそうだ。

数分後

何も起こらない

もう数分後

「え〜っつと……………やあっ」

そろそろイライラしてきたのでとりあえず<sup>フロミネンスコントロール</sup>火炎操作を使って炎のクナイを2つ作り、ゾンビ達の水晶に投げてみた。

パリーン、という音と共にゾンビ達の水晶が割れた。

「終了!!」

「……………」

サリーは茫然とし、僕は「こんなんじゃ勝っていいの？」と混乱し、ゾンビ達はやっぱり何もしない。

「勝者、キリヤマユウタ、サリー・シルフィード」

「……………勝ったの？」

「勝った……みたいだね」

というか、このゾンビ達はどうやって一回戦を勝ったんだろう。

そして、何やかんやで準決勝

凄い勢いでそれまでの戦いを飛ばされたけどそれはそれとして、もう準決勝だ。

「気を抜かないようにね」

「う……うん」

さっきのシード君達もまだ勝ち残っていた。

「始め！」

審判が開始を告げるとほぼ同時に僕以外全員が後ろに下がり、呪文を唱え始めた。

僕らの相手は狼人間みたいな男が大小2人だ。

「大地に宿る力たち我らの拳となれ」

「大地と緑と大空の力この杖に宿れ」

3人が呪文を唱えている間に目に緑色の星を浮かび上がらせつつ目の能力、ウィンドコントロール風力操作を発動させて空気を操作し、右手に竜巻を生み出

しその威力で飛び、狼男の大きい方の顔面に飛び蹴りをした。

「ぐえ！」

大きい方を蹴つ飛ばした後、そのまま竜巻の風向を操って小さい方の後頭部に踵落としをくらわせ、後ろに吹っ飛ばした。

「ぐあ！」

「やあー！」

そこにサリーの距離無視殴り（僕命名）が腹部に直撃し、小さい方の狼男は泡を吹いて気絶し、その後キツチリサリーが水晶を壊した。

「よくも兄貴を！」

（兄弟だったんだ。しかも、マ〇オとル〇ージみたいな身長差だし）  
弟狼がブチギレて、さっきの呪文で作った光の爪を振り回しながら突っ込んできた。  
でも、

「くらえ！」

さっきの竜巻がまだ残っているの、それを弟狼に向けて飛ばした。

「ああ…ああ…あ」

そんな呻き声と共に弟狼は泡を吹いて気絶し、水晶がさっきの衝撃で割れているのを審判が確認して告げた。

「終了！勝者キリヤマユウタ、サリー・シルフィード！」

こうして準決を勝突破した

**第十二話：準準決勝、準決勝（後書き）**

次は決勝です。

第十三話（前編）：決勝戦（前書き）

決勝戦と言う事で気合いを入れ過ぎ、まさかの前中後編になりました。今回はまともに戦いますんで、普段の0、5割増しの期待で読んでください。

### 第十三話（前編）：決勝戦

何やかんやあったけど、もう決勝戦だ。

そういえば、あの水晶はミニ結界的なもので、身に着けている者の受けたダメージを肩代わりしてくれるらしい。そして、ダメージが限界に達すると割れるらしい。

「決勝か……」

「緊張してるの？」

「ほどほどにね」

決勝の対戦相手は、案の定あのタッグだ。  
審判がやってきて、時間と対戦する4人を確認し告げた。

「開始！」

やはりいつも通り、僕を除く全員がバックステップで後ろに下が…  
………らなかった。サリーと子おっさん（名前忘れた）は下がったが

「なっ！」

あの目つきの悪いシード君が、大剣を振り下ろしいきなりサリーに斬りかかった。

「させるかああああ！」

速攻で水流操作を発動、空気中の水分で水を作り温度を下げ氷の剣にしてシード君の大剣を間一髪で受け止めた。

「呪文無しで……魔法を使ったと？」

今回は呪文を唱えるフリをする暇もなかったので、唱えるフリをしていなかった。

「……………大地の精霊！この杖に大地の力を！！」

「チツ！」

今間に呪文を唱えたサリーの杖での攻撃を、シード君バックステップで避けた。

「……………争いを鎮めるために魔法を絶やせ！」

子おっさんが呪文を唱え終わった瞬間、サリーの杖の光が消えた。

「何で！」

「ふえっふえっふえっふえっ魔法を無効化したんじゃ〜ふえっふえっふえっふえっふえっふえ」

(鬱陶しいな……ふえふえふえ言っし……)

子おっさんが言い終わるとほぼ同時にシード君がサリーに突っ込んだ。

「うおおおおー！」

どうやら、最初に少年が突っ込んできて隙を作らせ、その間に子おっさんが呪文を唱え魔法を無効化し、後はシード君が相手をポッコポコにという戦い方なんだろう。

でも、僕が使うのは超能力なので問題はない。

「たあ！」

2人の間に割り込み、さっきの氷の剣で大剣を受け止めた。

「おい！ジジイ！！こいつの魔法は無効化されてねえぞ！」

「分からん！そっちのお譲ちゃんのは無効化されとるから不発ではないようじゃが」

「なら！！！」

シード君が叫ぶと、大剣の表面に赤いオーラの様なものが出てきて

「なっ！！！」

大剣と接している部分が融け始めた。

（剣に炎を纏わせてるのか！）

「くそっ！！」

能力を風力操作ウィンドコントロールに切り替え、右手に小さな竜巻を作りその竜巻力で上空に飛んだ。

が、

「しまった!」

今、魔法が使えないサリーの方へ少年が向かって行った。

「こっちは良いから!!あっちを倒して!!」

「分かった!」

サリーがシード君の攻撃を避けている隙に竜巻の風向を操り子おっさんの所まで一気に近づき、ビビっている子おっさんに竜巻をブチ当てた。

パリーン!、という音と共にダメージに耐え切れなくなった水晶が砕け散った……………2つ

そう、2つ砕け散った。子おっさんだけじゃなくサリーの水晶もだ。

「これで……………」

「一対一か……………」

**第十三話（前編）：決勝戦（後書き）**

次は主人公の最後の能力が出る予定です。

第十三話（中編）：雷撃操作へエレキコントロール（前書き）

今回、主人公の最後の能力が出ます。

第十三話（中編）：雷撃操作へエレキコントロール

「たああああ！」

「うおおおお！」

ガキイイイイイ

という音と共に僕の氷の剣とシード君の大剣が交わった。

「ハアアアア！」

シード君の雄たけびと共に大剣から赤いオーラの様なものが出てきて、少しずつ氷の剣が融けてくる。

このままでは氷の剣がもたないので能力を風力操作ウィンドコントロールに切り替え、氷の剣を捨てて後ろに下がる。

「！？お前！なんだその目！？」

能力発動の証の星に気付き、シード君が静止した。

（今だ！）

その隙に風を集めて圧縮し弓と矢の形に整え、シード君に向けて構えた。

「ハアアア！」

「な！」

ギョオオオオオ！という爆音と共に目には見えない圧縮された風の矢がシード君に向かって飛んで行った。

（いける！）

そう思ったがシード君がとりあえず前方に放った斬撃に風の矢は受け止められた。

が

それほど力を込めずに放った一撃では風の矢は完全に受け止められなかった様で、後ろへ流れた。

その一瞬の間を逃さずに風力操作ウインドコントロールを使い急接近し、能力を火炎操作プロミネンスコントロールに切り替え炎を纏わせた拳をシード君の脇腹に叩きこんだ。

「ハア……ハア」

そのままシード君は吹っ飛んでいき会場の壁を破壊し、土煙を巻き上げた。

「勝った……のか？」

必死で戦っていたので水晶が割れる音が聞こえなかった。しばらくすると土煙が消え、シード君の姿が見えてきた。水晶は……割れていない。

「くそっ！」

殴り飛ばされて壁に衝突する寸前に剣を壁に突き刺してダメージを軽減していたようだ。

シード君が壁から大剣を引き抜き思いつきり地面を蹴ってこつちに接近してき、大剣を横に一振りした。その一撃をしゃがんでかわし、飛び上がる勢いを利用してアッパーを炎の拳でシード君に決めた。

「それが……どうした!!」

だけどシード君は倒れずに右手で僕の腕を掴み、残った左手で大剣を僕の脇腹に振るつた。

その威力で会場の反対側まで飛ばされた。でも、壁に衝突する直前に能力を風力操作ウインドコントロールに切り替えて壁との間に風の壁を作り、直撃を防いだので水晶は割れていない。

「しづといな…ハアハア…お前」

「ハア…ハア…そつちこそ」

しばらくの沈黙の後、僕らは2人同時に前方に踏み込んだ。

「ハアアアアアアアアアアア!!」

「オリヤアアアアアアアアア!!」

最後の能力の発動の証、黄色い星を目に浮かびあがらせ雷撃操作エレキコントロールを発動し、電気を発生させそれを圧縮しプラズマボール（螺○丸形）を作つて

それでシード君に殴りかかり、シード君は今までで一番色が濃くて大きいオーラを大剣に纏わせてお互いに最高威力の攻撃をぶつけた。

**第十三話（中編）：雷撃操作へエレキコントロール（後書き）**

次回、決着と新展開の予定です。

第十三話（後編）：決着（前書き）

今回で『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル大会！』は終わります。そして、新展開です。

第十三話（後編）：決着

ギョオオオオオオオオオ

という爆音が轟き、ともすれば鼓膜が破れそうなほどだった。水晶の耐えられるダメージの限界を超え、水晶が割れた。それでもまだ残っていたダメージが全身を貫いた。

「つつ……痛い……」

地面を数メートル転がってようやく止まることができた。そして、そのまま立ち上がりシード君の水晶を確認する。あっちも立ち上がってこっちの水晶を確認しようとしていたのですぐに確認できた。

「引き分け！」

いつの間にかそこにいた審判が試合の結果を告げた。

そう引き分け、2人共水晶が割れていた。

「じゃあ、優勝はどっちに？」

「……俺達の負けで良い」

それだけ言い残し、シード君はその場を去って行った。ついでに子おっさんも。

と、いうことで僕達は『集え強者！第五回ビルド街王決定タッグバトル大会！！』に優勝した。

「……………」

「……………ねえ」

「なに？」

大会も終わったので僕らはまた町をブラブラしている。話題もないのでほぼ無言でだ。

「もう帰ろうか？」

「そうね……………」

そろそろリリアも気がついた頃だろうと思いついて帰ることにした。

そして僕らはまたあの王城に戻ってきた。

何故か今は城が騒がしい。

「如何したの？」

サリーが通りがかった猫耳のメイド？さんに尋ねた。

「あつシルフィードさん！大変なんです！！」

「何があったのか説明して」

「シャルマージさんがさらわれました！」

「！」

そのメイド？さんが言うには、何故か突然王城の結界が消えてカントルガ王国の兵が侵入してきてリリアをさらっていったらしい。

「結界はもう元に戻っているらしいです」

「で、今リリッチは何処にいるの？」

「国境付近にこの前作られた前線基地にいますという情報があります」

「救出部隊は？」

「進軍部隊の部隊が奇襲と同時進行で救出に向かうそうです、シルフィードーさんは今日は臨時出勤扱いでもしもの敵襲に備えて北の守りを固めてください」

「分かった！」

人通り話を終えると、サリーは走って王城を出て行った。

「僕はどうしたら良い？」

「貴方様は……客人なので休んで構いませんが、よければ救出部隊に同行していただけませんか？私たちは数で圧倒的に負けているので」

「分かった」

救出部隊は10分後に出発するらしい。僕は用意されていた自室に戻り、リュックの中から必要最低限の物だけ持ってさっきの猫耳さ

んに言われた集合場所に向かった。

第十三話（後編）：決着（後書き）

今回は文字数少なかったですね、すいません。最近クラブの試合と  
かで忙しくて……すいません言い訳ですね。

第十四話・結界と変わったキレ方をする近頃の若者（前書き）

今回は何か……………すいません。変な設定付け加えてしまいました。

#### 第十四話：結界と変わったキレ方をする近頃の若者

集合場所に行くのと斧やら鎌やら物騒な武器を持った人達……じゃなくて魔族たちがいた。数はざっと見て100人ほどだ。

「貴方がシャルマージさんの護衛の方ですか？」

「はい」

「では行きましょう」

隊長っぽい方が僕に確認をした後、僕らは出発した。

数キロ北に進むと、国境の結界についての。

「進軍部隊隊長ガリス・ジャークです」

「防衛部隊第3部隊部隊長サリー・シルフィードです。事情は把握していますので今開門しています。ご武運を……って何でユウタ！？」

「僕もリリア救出に行くことになったんだ」

「えっ！……そう……なんだ……死なないでよ」

「うん……分かった」

ハース王国を出て、しばらく歩いて別の結界の所までやってき。多分、これがその前線基地の結界なんだろう。

「隊長さん、どうやってこれを壊すんですか？」

「地道に攻撃を加えていきます。これだけいけば1日あれば壊せます」

1日、その日数は僕にとって絶望的日数だった。

「え……………そんなにも？じゃあ、その間にリリアが連れていかれたら？」

「……………」

「ど、どうにかならないんですか！！？」

「どうにもなりません！あんな規模の結界は普通は10日はかかるんです！！それを考えたら、1日なんて」

辺りを見回すと、結界の破壊をしていない人は寝たり遊んだり、各々の時間を満喫している。その危機感の欠片も見えない態度に、僕は怒り心頭した。

「分かった、俺がやる」

「！？」

僕はキレると、一人称が俺になって口数が少なくなるという変わったキレ方をする。

「どけ」

結界を破壊しようとしている魔族たちを押しつけ、結界の少し前に立つ。

そして、持ってきていた柄と鞘を取り出し、鞘に柄を差し込んだ。  
エレキコントロール  
電撃操作を発動させ鞘の中に電気を溜める。

「なっ！何を！？」

「黙れ、気が散る」

驚きの声を適当に流して、電気を溜めるのに集中する。

「はあああああああ！……………超電磁斬！」

鞘に溜めた電気を、抜刀と掛け声共に前に放つ。

解き放たれた電撃は結界に衝突し、パリーンという音と共に結界を砕け散らせた。名前は半パクリだけど気にしない。

「これで、良いでしょ？」

「は……………はい」

隊の方々は啞然としていた。

ちなみにこんなにも強力な電撃を放つことができたのは、さっきはブチ切れて感情が強くなっていたからだ。超能力は使用者の感情の強さに比例して強くなるので、さっきはあんな電撃が放てたと言っ  
訳だ。

「突撃いいいいいい！！！」

隊長の一声で、唾然としてきた方々は次々と城の中へ突撃していった。

「ちあ……行くぞ」

**第十四話：結界と変わったキレ方をする近頃の若者（後書き）**

来週はテスト前で投稿できないので今回に2話投稿しておきます。

第十五話：シードふたたび（前書き）

またアイツと戦います。

## 第十五話：シードふたたび

感想を言うと強かった。救助部隊の方々は、奇襲という事もあって前線基地の守備隊を圧倒していた。そして、しばらくすると、隊長が引き返してきて僕の所にやってきた。

「あの、またあの結界を破った技を放てませんか？」

「え、あれはもう………」

あんなレベルの力を使うにはかなり感情が高ぶっていないといけないので今は無理だ。

「やはり、あんな強力な技は何度も放てませんか。では、回復次第守備部隊の排除に協力をお願いします」

「ええ、はい」

別に疲れてもないので少し休憩して行こうと思ったその時だった。

「うおおおおおおおおお！」

聞き覚えの雄たけびと共に味方の兵が数人吹き飛んだ。

「おりゃあああああああ！」

その雄たけびはだんだん近づいてきて、ついに僕の前の兵士を吹き飛ばした。

「お、お前！」

「シード君」

やはり雄たけびの正体はシード君だった。少し硬直していたが、シード君は迷うことなく僕に斬りかかってきた。僕は風力操作ウィンドコントロールを発動させ、手にミニ竜巻を作り後ろに下がった。そして、シード君が空を切った隙に数人の兵がシード君に攻撃をする。

「チツ！」

シード君は剣にオーラを纏わせ、それを一気に放出してその勢いで後ろに下がり攻撃を避けた。

そして、そのままシード君は兵達をなぎ倒して奥の部屋に撤退していった。

「行ってください！今のうちに！！」

「……………はい！」

シード君が通った道がまた兵で埋まる前に、さっきのミニ竜巻を使ってシード君が行った行った部屋に飛び込んだ。

中はただ広いだけで、中には何も物を置いていない。学校の体育館からさらに物をなくした感じた。そして、その部屋のほぼ中央にシードくんがいた。

「やっぱり着いてきたか……………まさかお前が敵だったなんてな」

「そっちこそ」

僕は赤い星を目に浮かび上がらせ能力を<sup>プロミネンスコントロール</sup>火炎操作に切り替え、シード君は大剣に大会の時とは違う青いオーラを纏わせ、お互いに準備を整える。

「行くぞ！」

シード君が溜めていたオーラを一気に放出し、高速で近づいてくる。  
僕は<sup>プロミネンスコントロール</sup>火炎操作を使って炎を生み出し、それを盾にする。

「こんなのが効くかあああああああ！！！」

シード君はさっきの青いオーラを大剣に纏わせ炎の盾を横なぎで斬り裂いた。そして、そのまま僕を大剣で斬ろうとする。それをさっきの鞘で防ぎ、速攻で炎を柄の先に灯し炎の剣を作り、それをでシード君に斬りかかる。

「何なんだよお前は！」

シード君は体を反対に回転させ大剣で炎の剣を貫き、そのまま僕に大剣で斬りかかる。

僕は後ろに倒れて大剣を避けるが、青いオーラに触れてしまった。

「ッ！」

僕は、倒れる寸前に緑の星を目に浮かびあがらせ<sup>ウィンドコントロール</sup>風力操作を發動させ、辺りの空気を集めれるだけ集めて圧縮し僕の後ろで解き放った。

「ぐっ！」

その衝撃で僕は上空に吹き飛ばされ、シード君も後ろに吹き飛んだ。  
僕は風力操作ウインドコントロールを使い空中に浮遊して体制を整える。

「何で」

「？」

「何でお前はそっちなんだよ！」

**第十五話：シードふたたび（後書き）**

この戦いは次回辺りで終わる予定です。

## 第十六話：戦う理由（前書き）

みなさん、お久しぶりです。やっと中間テストが終わりました！！  
またテストなどで投稿できない週があるかもしれませんが、これか  
らもよろしくお願いします。

## 第十六話：戦う理由

シード君は速攻で起き上がり青いオーラを大剣に溜め一気に放出し、僕の方へ向かってきた。

「何でお前はそっち側なんだよ!!」

僕の目の前まで飛んできたシード君の横なぎをウィンドコントロール風力操作で地上に降りて避けた。

「こっち側に居た方が戦いは早く終わる!なのになにに何で!!」

だけど、さらにシード君は地上に落ちる勢いを利用して僕に斬りかかる。

それをギリギリでかわし、能力をアクアコントロール水流操作に切り替えた。

「何でなんだよ!」

シード君はすばやく体制を立て直し、あの赤いオーラを放出し、その威力で回転し大剣を振るった。

ガキイイイイイイイイ

激しい音が部屋中に鳴り響いた。

「僕だつて……」

「?」

僕は、鞘でその大剣を受け止めていた。

「僕だつて好きで戦つてるんじゃない」

「……じゃあ、何で戦うんだよ!!」

今までで一番大きなオーラを纏った一撃をシード君はくりだした。それを、柄の先に水流操作アクアコントロールで作った水の剣で真ん中のあたりまで止め、途中で凍らせた。

「僕は、ただ友達フレンドを助けただけだ!」

動きが止まった一瞬に目に黄色い星を浮かび上がらせ能力を電撃操エレキコントロール作に切り替え、速攻で作ったプラズマボールをシード君にぶつけた。

「がああああああああ!!」

シード君は数メートル後ろに吹き飛び、壁にぶつかってやっと止まった。

「……なあ、何でどいつもこいつもそっちの味方をするんだろ  
うな?」

「……………」

「こつちにいた方が戦いは早く終わるのになんでだろうな……………」

「早く終わっても…こんな事をするようなヤツらが勝ったらだれも  
幸せにならないからじゃないかな?」





**第十六話：戦う理由（後書き）**

次回はシルバートと本格的に戦う予定です。

## 第十七話：互いの力（前書き）

何か最近だんだんアイデアが浮かばなくなってきました。でも、頑張って毎週投稿を続けます。

## 第十七話：互いの力

「なっ！何で！！」

「おや、まさか今のが全力ですか？それは拍子抜けですね」

土煙りの中のシルエットが右手を振るのと同時に、土煙が消え去った。

「ところで、貴方はどうやって呪文も魔法陣もなしに魔法を使っているんですか？」

何か文字の様な物の書いてある、手袋の様な物をこっちに見せながらシルバートは聞いた。

「……………」

「答える気はないようですね。残念です、興味があつたのに」

シルバートがまた右手を振るい、見えない何かが僕の方へ向かってくる。

ガギイイイイイ

それを鞘で防ぎ、目に緑色の星を浮かび上がらせ能力を風力操作にウインドコントロール切り替え空中に避難し、次の攻撃に備える。

「その鞘、どうなっているんですか？私の攻撃に耐えるだなんて…  
…それにさっきの貴方攻撃の衝撃にも耐えていましたし……………」

「これは、あつちの世界の金属の形を変える能力者の友達に作ってもらった特注だよ」

「あつちの世界？能力者？それは貴方の魔法に関係があるのですか？」

「さあ、どうだと思っ？」

今の会話の隙に辺りの空気を圧縮し空気の弓と矢を作り、シルバートに発射する隙を窺う。

「さあ、分かりませんが……何故貴方はまた話の途中に攻撃を仕掛ける準備をしているんですか？」

「！」

「気付かないとでも思ったんですか？」

バレたものはしょうがないと、シルバートに向けて空気の矢を放った。

「効きませんよ」

シルバートが右手を振ると、空気の矢が弾けた。

(どうなってるんだ？あいつは？)

右手を振るだけであの圧縮矢を弾けさせたり、普通見えないはずの空気の矢に気付いたり、最初の超電磁斬をくらってもキズ一つつか

ないだなんて、ありえないはずだ。

「お教えしましょうか？」

「何を？」

「私がさっきの攻撃を見抜き、退けた理由と貴方の最初の攻撃を受けて無傷だった理由ですよ。ただし、貴方の魔法の秘密も教えてもらいますよ」

「何でそんな事を？」

「私の力の正体を知ったところで、どうしようも無いからですよ」

「……………」

少し黙って考えてみた。この状況をどうにかするにはどちらの方がいいかを。

「分かったそれでいい」

「そうですね、それは良かったです。では、私から言いましょう。私が貴方の攻撃を見抜けたのは、見えるからです」

「何が？」

「空気の流れがです。そして私のこの魔法陣に書かれた魔法は風を圧縮、拡散させる魔法。これで分かりましたか？」

コクリと相槌を打ち、分かったことを伝える。

「そして、貴方の最初の攻撃を受けて無傷だった理由、それは……  
…私の体は周りの魔力を取りこんで再生できるからですよ」

「再生!？」

「ええ、だから正確に言えば攻撃を受けなかったのではなかったの  
ですよ。さあ、次は貴方の番です」

僕は、超能力の説明をあらかじめの説明をシルバートにした。

「ほう、つまり貴方のその力は魔法ではなく超能力といい、呪文も  
魔法陣も必要ないのですか」

「まあ、そんなところ」

「そうですか、その力は生まれつきのものであり私たちには使えな  
いのですか……では、貴方はもう用済みですね」

シルバートは右手を振り、空気を放った。

僕は、ウィンドコントロール風力操作を使ってその空気を上に上げ攻撃を避け、ウィンドコントロール風力操作  
を使い小さな竜巻を作り、それをシルバートに投げつけた。

「効きませんよ」

シルバートは右手を振って小さな竜巻を拡散させ防いだ。その隙に  
思いつきでかい竜巻を作り、シルバートに投げつけた。

「これでどうだ!」



第十七話・互いの力（後書き）

もうしばらくシルバートとの戦いは続くと思います。

## 第十八話：心強い加勢（前書き）

今週の金曜日に実力テストなるものがありまして、来週の投稿が遅くなるかも知れません。もし投稿が遅れたらすいません。

## 第十八話：心強い加勢

(デカすぎる……防げない)

物凄い勢いで襲いかかってくる風の竜は完全に僕の操れる風の量を超えていた。もう避けることもできず、ただ手をクロスにして目を固く瞑って風の竜の衝撃に耐えようとした。

が

(……………来ない?)

目を開けて状況を確認する。

「シード君!」

そこにいたのはシード君だった。大剣を床に突き刺し、僕と自分を風の竜から守っていた。

「シード、何のつもりだ?まさか…裏切るつもりじゃないだろうな?」

「シルバート、俺はこっちで戦いを止める。戦いが終わった後も平和が続く世界にするために」

「そうか、ならお前も一緒に……死ぬ。風の精、再び竜の——」

シルバートがまたあの風の竜を生みだす呪文を唱え始めた。

が

「……障害を薙ぎグホッ」

途中で何者かに妨害された。その妨害は、距離を無視して殴ったような攻撃だった。

「私の来るまでに何があったのか知らないけど、まああいつは敵でよかったわよね？」

「サリー！」

「次から次へとおおおおおおおお！！！」

シルバー트가体制を立て直し、高速で右手を何度も振るった。僕らはそれぞれ回避し、僕がシルバー트に向かって行くこととするのをシード君が引きとめた。

「待て、お前はあつちを助けてこい」

「でも」

「でも、じゃない。こつちで引きつけるから」

「……うん」

ウィンドコントロール  
風力操作を使い、シルバー트의攻撃の間を縫ってリアの所へ行った。

「大丈夫？」

戦いの衝撃でリリアを拘束していた椅子は壊れて、リリアは気絶していた。

「うう…ユウタ君？…あっ！！そうだ。私とハーモナイズ一体化してください」

「駄目だ！」

「大丈夫です！…絶対に大丈夫です」

「本当？」

じっとリリアを見つめる。リリアは一切目線をそらさなかった。

「分かった」

リリアの手を握り唱える。

「「ハーモナイズ」」

閃光が瞬き次の瞬間にはリリアはそこに居なかった。

『さあ、行きましょう』

(うん)

地面を強く蹴り跳躍し、2人とシルバートが戦っている所まで一気に行った。

「らああああ！！」

跳躍の勢いを利用しシルバートの顔に蹴りを繰り出す、当たる直前にシルバートが右手を振るい、逆に吹き飛ばされた。

「風の精、三度竜の魂となりて我が障害を薙ぎ払え！！」

右手を振るって高速で動きながら呪文を唱えたため、サリーも妨害ができなかった。

そして、風の竜は僕の方へ向かって来た。2人はシルバートの相手で手いっぱいこつちを助ける余裕はなく、今の僕の感情じゃ感情が小さすぎてこの竜は操作できない。

(でも、今は僕1人じゃない)

右手を突き出しウインドコントロール風力操作を発動させる。

ギョオオオオオオオオオ

激しい音とともに風の竜が僕に向かって来た。が、竜が右手に触れた瞬間にウインドコントロール風力操作で風向を真逆にして、シルバートに送り返した。

「なっ！」

シード君とサリーは避けたが、シルバートは思ってもみなかった事態に硬直し、避けることができず風の竜が直撃した。

様に目えたが、直後ブオオオオオオという音とともに風の竜が消し飛ばされた。

「図に乗るなよガキ共」

## 第十八話：心強い加勢（後書き）

あと2、3話でこの戦いは終わらせる予定です。

## 第十九話：方法（前書き）

来週からテスト前1週間になるので、来週か再来週は投稿できないかもしれません。

## 第十九話：方法

それからは激しい戦いがしばらく続いた。3人いる分こっちが有利だったが、シルバートはダメージをすぐに回復してしまうので時間がたつことに僕らは不利になっていった。

「はあ……はあ……はあ」

「くそっ」

（何か、何か無いのか？あいつを再生させない方法が）

『ユウタ君』

先までずっと黙っていたリリアが話しかけてきた。

（何、リリア？）

『再生させない方法ですが……あることはあるんです』

（どんな方法？）

『まずは、シルバートが再生に使う魔力を全てなくす、もう一つはシルバートを跡形もなく消すことです……多分どちらもできません』

おそらく、それは僕にできない事だ。だけど

（たぶん出来る。僕には出来なくても……僕らには出来る）

『…はい!』

能力をアクアコントロール水流操作に切り替え、床に手を付け

(行くよ)

『はい』

「銀世界」

能力をフルに発動させ床、天井、壁を凍らせた。

「「「!?!?!」」」

突然の足場の変化にサリー、シード君、シルバートは一瞬硬直した。

「サリー!シード君!下がって!!」

僕の声に反応し、サリーとシード君がシルバートから遠ざかったのを確認し、もう一度能力を使い部屋全体の氷を刃物のような形になる様に溶かし、何千何万もの氷の刃を作りだした。

さらに、能力をウインドコントロール風力操作に切り替えて3メートルほどの竜巻を作つてそれを放つた。その竜巻は氷の刃を巻き込みながらシルバートに向かつて進んでいった。

「ダイヤモンドダストサイクロン」

「……ふん」

シルバートが右手を振り、竜巻を拡散させようとしたその時だった。

「？」

不自然に竜巻が消え氷の刃が地面に大量に落ちた。

その後ろに隠れていた僕が風力操作ウインドコントロールを使って一気にシルバーに接近し、目の前にある氷に触れ水に一旦戻し水をシルバーを包みこみ、再び凍らせた。

「永久凍結」

「……勝ったの？」

「いや、違うな」

ピキピキ、と氷がひび割れ中からシルバーが出てきた。

「ふふふ、その程度でこの私が倒せるとでも思っていたのか？それ以前に、お前たちごときに私が倒せるとでも思っていたのか？」

シルバーは一切の外傷も疲労もない。対して僕らは、サリーとシード君は疲労困憊で僕はいくらリアの感情を合わせて能力を使っているとはいえ、そろそろ限界だ。

「サリー、シード君………逃げて」

「何言ってるの！」

「2人共もう限界でしょ？」

「お前だってもうヤバいだろ」

「それに……………これで決める」

その言葉に2人は黙り。しばらくしてコクリと頷いた。  
これが、最後の攻防だ。

## 第十九話：方法（後書き）

次でVSシルバートは終わります。

## 第二十話：最後の攻防（前書き）

テストで忙しいので来週はたぶん投稿できません。テストが終われば2話投稿するつもりです。

## 第二十話：最後の攻防

「おや、逃げるのですか？見方を見捨てて」

「違う、2人は逃げてるんじゃない。巻き込まれないように避難しているんだ」

「ふふふ、では何故貴方は逃げないのですか？」

「逃げる？……何勘違いしてるの？巻き込むって…僕がだけど」

言い終わると同時に、地面を蹴りシルバーボートに殴りかかった。

「ふん」

シルバーボートが空気を圧縮、拡散し僕を吹き飛ばそうとするが寸前でウィンドコントロール風力操作を使ってそれを避け、シルバーボートの顔面に思いっきりパンチを放った。

「つぐ！」

勢いをつけた一撃でシルバーボートが吹っ飛んだ。その隙に近くに大量に散らばった氷の刃を水に戻し、さらに空気中のありったけの水分も水に変え床にまいた。踝の辺りまで水が溜まった。自分の足元の水を氷に変え足場を確保し

「ぐっ、何を………する気だ」

ポケットの中から塩の入った袋を取り出し、中の塩をバラ撒いた。

「なあに……ただの理科の実験さ」

目に黄色の浮かび上がりせ能力を電撃操作エレキコントロールに切り替え、電気を思いっきり水の中に流した。

「ぐあああああああああ……！！！！！！」

純粋な水は電気をあまり通さないが、塩を入れることで良く電気を通すようになる。

が、シルバートはすぐに再生してしまい、ダメージは全く残らなかった。

「はあ、はあ……それが、どうした」

「知ってる？水を電気分解すると、酸素と水素が出来るんだ」

目に赤い星を浮かび上がりせ火炎操作フロミネンスコントロールを発動し、右手を構えた。

「問題、酸素 + 水素 + 火？」

「は？」

「正解は水と………激しい爆発だ！」

言葉と共に右手から発火させ、爆発を起こし、自分は能力で守った。

ブオオオオオオオオオオオオ

激しい轟音で鼓膜が破れるかと思ったけど、何とか大丈夫だった。

「アウトサイド」

唱えた瞬間一体化の時と同じ閃光が瞬き、隣にリリアが立っていた。

「終わった……んだね」

「はい、帰りましょう。みんなの所へ」

「うん」

「……本当に勝ったのか？あの……あのシルバーバートに」

「うん」

入口の戦いは、サリーとシード君が参戦した事によって勝敗が着いていた。

「ありえねえ……って言いてえけど……それを言ったらお前の存在もそうだしな」

シード君は笑っていた。

その後、シード君は僕らと一緒に行く事になり、サリーは勝手に来たため命令違反と言う事でクビ、というところでサリーも一緒に行くことになった。

「で、何処へ行くんだ？」

「とりあえず、シャルマージ王国へ帰ります」

「そう、じゃあ行くところか」

僕はシャルマージ王国へ歩き出した。

第二十話：最後の攻防（後書き）

次回から新章です

## 第二十一話：人間（前書き）

新章とか言ってもそんなに変わらないです。

## 第二十一話：人間

「……汝らの功績を称え、ここに……」

僕らはシャルマージ王国の王室で勲章を受け取った。この前カンテルガ王国であるシルバートを倒したのは実は物凄い事らしくこの国の王様、つまりリリアのお父さんから勲章を受け取っているのだ。ちなみに、僕ら（僕とサリーとシード君）は全員シャルマージ王国の国籍と言ふ事になったらしい。僕らは前とほぼ同じ格好だけど、リリアはお姫様なので綺麗なドレス姿だった。

「……これにて、受章式を閉式する。後、君達ははに残っておいてくれ」

「えっ、はい」

式が終わったので王室から出て行くことになると、王様に引き留められた。

しばらくすると僕らとリリアと王様、王妃様だけが残り、他の人たちは全員出て行った。

「……」

沈黙に耐え切れず、僕が発言した。

「あっ、あの……僕らに何の用でしょうか？」

「ははは、そんなに固くならなくても良いよ。キリヤマ君」

さっきまでの表情とは違う、優しそうな顔で王様はそう言った。

「用と言つのはだね、リアから聞いたんだが……君が人間だと言  
うのは本当なのかい？」

「はい、僕は人間です」

「その証拠を見せてくれるかい？」

「えっ、はあ………分かりました」

目に赤い星を浮かび上がらせて<sup>プロミネンスコントロール</sup>火炎操作を発動し、右手から炎を出  
した。

「それが『ちよつものつりよく』かい？」

「はい……それで、僕が人間だと何かあるんですか？」

「人間と言つのは、この世界では伝説上の生き物でね。『この世界  
に危機訪れしとき別世界よりやつてくる勇者』とされているんだ。  
つまりその通りだと、今この世界に危機が訪れている」

人間ってこつちの世界だと凄い過大評価されてるんだな、と思いな  
がら王様の話を聞く。

「その危機と言つのが魔王なんですよね？」

「！……………そうなのかい！？」

「えっ、少なくとも僕はそう聞きましたけど……………」

しまった。そう思った時にはもう手遅れだった。

「誰に……だい？」

「そっ、それは……………」

頭をフル回転させて言い訳を考える。

「言わなくてもいいよ。ただこれだけは聞かせてくれ、それは『言わない』のかい？それとも『言えない』のかい？」

「『言わない』、です」

「……………そうか、それなら良い。本題に戻るがね、『人間』であるキリヤマ君が来たと言う事はこの世界に危機が迫っているという事だ。つまり、キリヤマ君がそれだと言った魔王を倒さなければ侵略された国の魔族たちだけでなくこの世界自体も危ないという事だ。キリヤマ君、シルフィードさん、ガブリエル君。君の力はこの世界を救うために必要だ。協力してくれるかい？」

「はい…！」

「ああ」

「もちろん」

「そうか、ありがとう」

王様はにっこりと笑って言った。

「で、早速だが君たちはリリアの近衛隊に入隊してくれ」

と言うことで、僕らはリリアの近衛隊に入隊することになった。

## 第二十一話：人間（後書き）

近衛隊を出した理由は、単にキャラ数が少ないと思ったからです。

第二十三話・V.S隊長(前書)

今回の話目です。

## 第二十三話：VS隊長

「霧山裕侘です。よろしくお願いします」

「シード・ガブリエルだ、よろしく頼む」

「サリー・シルフィードです。よろしく」

今、僕らは文字通り自己紹介をした。ここはシャルマージ王国の王城の中庭、中庭と言っても広さは家一軒ほどで、東京オームの屋根なしみたいな構造をしていて、中央には決闘場がある。

「この3人が新しく私の近衛隊に入隊してくれた方たちです。仲良くしてくださいね」

「姫様、この三匹……ちゃんと強いですか？大剣の君と杖の君はともかく、剣の君。君からは全然」

近衛隊の隊長が僕を指差して言った。歳は僕らの少し上、16歳位で蛇の様に舌が割れているのが見え隠れしなければ見た目はかなりの美人だ。

「ユ、ユウタ君は強いです！」

リリアが弁解してくれたが、隊長の目は厳しいままだった。

「なら私と決闘よ」

「え、何ですか？」

「貴方が強いという証明のためよ」

その後、何だかんだで結局決闘させられることになり、僕と隊長は決闘場の中央に立ち、その他近衛隊の方々とリリア、サリー、シード君は場外で見守っている。

「チャール、よろしく」

隊長が名前を呼ぶと、おそらくそのチャールさんであろう方が出てきた。年齢は隊長と同じ年位の美少年で、犬の様な耳と尻尾が付いている。

「これより、シャルア・ヒュームとキリヤマユウタの決闘を始めます」

僕と隊長、シャルアさんの間に立ちチャールさんが告げた。

「始め！」

開始の合図とほぼ同時に、シャルアさんは後ろに下がって呪文を唱え始めた。

「この地に宿る聖霊よ、私の支配下で騎士の形となり敵を滅ぼせ」

そうシャルアさんが唱えると決闘場の一部が剥がれ、鎧を纏って剣を持った騎士の形になった。

「行け！」

シャルアさんの指示で騎士が僕に襲いかかってきた。  
鞘でその攻撃を受け止め、ウィンドコントロール風力操作を發動して右手に空気の塊を作り、それを騎士にぶつけて吹き飛ばした。騎士がバラバラに砕けて飛び、シャルアさんに飛んで行った。

「それがどうした!」

シャルアさんが手を前に突き出すと決闘場の床が盾になるように地面から突き出し、騎士の破片からシャルアさんを守った。  
ウィンドコントロール

僕はその盾で視界が隠れている隙に、ウィンドコントロール風力操作を使って高速移動をして盾に隠れた。

「隠れても無駄だ!」

突然盾が形を変え、僕を包む5メートル位のドームになった。

「潰せ!!」

シャルアさんの命令でドームが縮み始め、僕はウィンドコントロール風力操作でドーム中の空気を圧縮し、一気に解放した。  
凄まじい音と共にドームが吹き飛んだ。

「なっ!」

今度は不意を突いた様で、シャルアさんはドームの破片をモロにくらった。

それで怯んだ隙にウィンドコントロール風力操作で接近し、プロミネンスコントロール能力を火炎操作に切り替え柄から炎を出して炎剣を作り、シャルアさんの首に突き立てた。

「僕の勝ちですね？」

「……………分かったわ」

## 第二十三話・VS隊長（後書き）

前書き、後書きで書くことが無くなってきました（笑）

## 第二十三話・近衛隊（前書き）

今回、というかこの章はこんな感じでいきます。

## 第二十三話：近衛隊

「さっきは失礼したわね。私はリリア様の近衛隊隊長、シャルア・ヒューム。よろしく」

「さっき審判を務めさせてもらったチャール・ベレスです」

僕らは近衛隊の方々に自己紹介をしてもらっている。

「僕はソルク・ベーゼル」

「俺はサツツ・ラールス」

「私はシャン・リフアント」

上からドラキュラ、サイ男、雪女みたいな見た目をしている。近衛隊はこれで全員だ。

「で、キリヤマ君。さっきのは何？」

突然シャルアさんが聞いてきた。

「え？」

「だ・か・らさっきのは何？呪文も魔法陣も無いし、魔法の切り替えが早すぎるでしょ！」

「……………すみません。ちょっと待ってください。リリア、こっち来て」

とりあえず人間ってバラしても良いのか確認を取っておくと事にした。

「（リリア、僕が人間ってことバラしても良いの？）」「

「（人間は伝説の種族なのであまり言わない方が良いと思います）」

「（分かった）」

シャルアさんの方を向き、答えた。

「秘密です」

「それは秘術だから教えられないという事？」

「えっ、はいそうです」

「……良いわ。姫様は知ってるみたいだし。ようこそ近衛隊へ」

僕はシャルアさんと握手をした。

「私たち近衛隊は姫様を護衛するための隊なんだけど、普段はあまり仕事が無いの。この前も私たちに黙って行っちゃったから着いて行けなかったし。と言う事で、普段はトレーニングをしてるだけね」

「そ、そうなんですか？」

「そんなものよ」

とりあえずそれで解散となり、シード君は「寝る」と言っただ部屋に籠ってしまい、サリーは「こっちの生活に慣れるために店とか見てくる」と言っただ何処かへ行ってしまった。  
と、言っただ事だ

「えっと、何処から行きます？」

僕はリリアと城下町をめぐる事になった。

「えっと、リリアのお任せだ」

「はい、分かりました」

この城下町巡りで分かったこと

- 1、リリアの気は凄いい
- 2、普通に歩いて行ても誰も人間だとは気付かない
- 3、ただし恰好が周りに浮いているのでジロジロ見られるくらいだった。

そして、現在僕らは王城の広間に居る。

「今日はありがとうリリア、また明日」

「いいえ、こんな事でしたらまたいつでも」

リリアはお姫様なので、城の中の方へ帰って行った。

僕は近衛隊なので、部屋は城の中でも端の方にある……らしい。  
らしい、と言っただのは実際は行った事が無いので、どんなのか分からないからだ。

「やあ、キリヤマ君」

「チャールさん」

後ろから声を掛けてきたのは近衛隊の副隊長のチャールさんだった。

「部屋まで案内してあげるよ」

「ありがとうございます」

チャールさんが部屋まで案内してくれた。

「ここだよ、君の荷物…と言ってもそれだけだけれど、そこに置いてあるから」

「はい分かりました」

「ねえ、キリヤマ君」

チャールさんがニヤニヤしながら僕に聞いてきた。

「はい、何ですか？」

「姫様とはどういう関係かな？」

「関係？」

「そう、凄く仲が良さそうだな〜と思ってね」

「そうですね？」

「は、じゃあお休みなさい」

「お休みなさい」

そう言ってニヤニヤしながらチャールさんは自分の部屋へ帰って行った。

## 第二十三話・近衛隊（後書き）

突然ですが、この小説を不定期更新にします。

理由は、そろそろ夏休みになるのでまあまあ投稿できると思っています。ですが、その後は受験に向けて本格的に頑張らなくてはならないので週一で投稿は厳しいと思うからです。

## 第二十四話・チャールさん（前書き）

先日はすいませんでした。これからはあんな事が無いように気を付けます。

## 第二十四話：チャールさん

「おはよう、キリヤマ君」

「おはようございますチャールさん」

あさ何となく城をぶらぶらしているとチャールさんが挨拶をしてきた。

「キリヤマ君。何処へいくのかな？」

「何処へとはなくぶらぶらしています」

「へーそうか、ちなみにそっちはもう少し行くと王族と世話係以外は立ち入り禁止なんだけど」

「そうなんですか、じゃあこれで失礼します」

言われた方向とは逆の方向へ行くと、後ろでチャールさんが、ふんと言っていたのが聞こえた。

今日は特に何の仕事も無い、とさっきまたまた会ったシャルア隊長に聞いたのでとりあえず生活必需品を買いに町にやってきた。

「あゝ、何が無いんだっけ？」

とりあえず来たはいいが、何を買いに来たか忘れてしまった。

「あつ、キリ君」

「サリー」

偶然にもサリーも街に来ていた。そして、何故かこの前の戦いの後から「キリ君」と呼ばれるようになった。

「何してるの？」

「必要品の買い出しに……」

「じゃあ、今ヒマ？」

「えっと」

「ヒマでしょ？」

サリーの目力に負けた。

「分かった。負けたよ」

そう言うとサリーは目を輝かせて僕を連れて行った。

> side リリア<

王城の中で私はユウタ君を探していました。その途中でチャールさんに会ったので挨拶をしておくことにしました。

「おはよう、チャールさん」

「おはようございます姫様。どちらへお行きになられるおつもりでしょうか？」

「えっと…その……」

「誰かを探してらっしゃるようでしたが〜」

チャールさんはいつもこうだ。いつでも私の痛いところを突いてくる。

「キリヤマ君ですか？」

「えっ！」

「図星のようですね」

「……はい」

私は諦めてそれを認めました。

「何故でしょうか？」

「何故って言うか…その……」

「キリヤマくんに会いたいんじゃないんですか？」

もういいです。諦めます。

「そうですねー！」

「ははは、怒らないで下さいよ姫様。姫様ってキリヤマくんが好き  
でしょう？しかも片思い」

「なななななななななななななななな何言ってるんです  
か！！！」

何でそれを！

「だって姫様分かりやすいんですもん」

「そっ、そうですか？」

「はい、今認めましたね」

「ううううううう、何でそんなにイジワルするんですか？」

チャールさんにいつも思っていたことを言ってみました。

「ははは、僕は誰かの弱みを握ったりして、それでいつバラされる  
のか怯える姿を見るのが楽しいだけですよ」

チャールさんは変態でした。

第二十四話：チャールさん（後書き）

もう暫らくこんな感じですよ。

## 第二十五話：奥義（前書き）

最近忙しくて投稿できなくてすみません。がんばって書きますんでこれからもよろしくお願ひします。

## 第二十五話：奥義

「ねえ、サリー。こんな所で何するの？」

僕はサリーに王城の庭もとい決闘場につれて来られた

「ん？奥義」

「お……奥義？」

「そう、奥義。この技は、強力な風の魔法属性を持つ魔法使いが2人必要なの。キリ君のちようのうりよくに風を操るのがあったでしょ？あれだけの力があればたぶんできると思うの」

サリーの説明によるとその奥義は1人が圧縮した風の塊を作り、もう1人がその形を整えて剣の形を作りそれを放つ技らしい。

「私の魔法は聖霊の力を借りて周りの空気を全て同じ空気とし、距離を無視して干渉する魔法なの。だから形を整える係りが向いてるわ。つまりキリ君は風の塊を作る係りね」

「分かった」

目に緑の星を浮かび上がらせて風力操作を発動。ウィンドコントロール周りの空気を圧縮して空気の塊を作りだした。

「…凄い……でも、あの戦い時には全然とどいてない」

「あれは、僕の感情にリリアの感情も足されてたからだよ………」

言うか早くして。結構きついから」

「はいはい。大地の聖霊よ、木々たちよ、我が杖にその力を宿せ」

サリーが呪文を唱え、空氣の塊の形を変え始めた。それが劍の形となり、サリーがそれを空中に投げ飛ばした。

ポオオオオオオ!!

轟音と共に空が揺れた。

「うお!!」

「……ダメねあれじゃ」

「あれで!?!」

「でも、ありがとうキリ君」

ちゅっ

そんな音が聞こえて来そうな光景だった。

「ひえっ?」

「なに真っ赤になってるの?これはエルフ流のお礼よ」

「そっ、そうなんだ」

自分でもわかる位顔が真っ赤になっていた。

「そんな……………」

その声を聞いて振り向くと、リリアが向こうに向かって走って行っていた。

> side リリア<

私は見てしまいました、ユウタ君とサリーちゃんがキスをしているのを。

(そうなんだ…ユウタ君は…サリーちゃんが)

妖精フェアリーでのキスは愛し合う者達の誓いの証とされています。それを…私は自分の部屋まで走って行ってベットに飛び込みました。

「うっうっうっうっうっ…………ヤダよお……………」

私は気付きました。私がこんな風に行っていると色々な方に迷惑をかけてしまうのに、そんな事がどうでもよくなる位にユウタ君の事が好きだったと。

「どうかいたしましたか？姫様？」

世話役のルールさんだ心配そうに尋ねてきました。

「だっい丈夫…………でっすよ」

「姫様は優しいから、自分よりも他を優先しちゃうんですよ。たま

には自分も優先してください。私は姫様の見方である気ですよ」「

「ラールさん……」

「行ってらっしゃい。姫様」

私は部屋を飛び出しました。

第二十五話・奥義（後書き）

そろそろシリアスな感じに戻したいと思います。

第二十六話：コイスルオトメ（前書き）

かなり遅くなりました。しかも短いです。すいません何も言えませ  
ん。

## 第二十六話：コイスルオトメ

「キリ君、ダツシユ！」

「え？」

「早くリリツチを追いかけてって言うてるの！」

「分かった」

キリ君はリリツチを追いかけて行きました。

「お前：さっきの嘘だろ」

「あらシー君盗み聞き？」

「通りかかったら偶然聞こえたんだよ」

「ふ〜ん」

目が笑ってないから本当なんだろうと思う。

「お前キリヤマの事好きだろ？」

「ええ、そうよ。悪い？」

「お前一国の姫と争う気か？」

「何言ってるの？姫様なんかと争う気ないわよ」

「？」

「リリッチはただの恋する乙女よ」

シー君はため息をつきながら手を額にあてた。

> s i d e 裕 詫 <

「あの、通してもらっていいですか？」

「ダメです。ここからは王族とその世話係しか入れません」

そうだった。リリアの部屋は王族とか以外は入れないんだった。

「あー！ユウタ君！..！」

「リリア、さっきはどつしたの？」

「えっ.....その.....」

リリアは顔を真っ赤にしてダメってしまった。

とりあえず、リリアを僕の部屋に連れて行って落ち着かせる事にした。

「（ユウタ君のお部屋.....ユウタ君の匂い.....）」



「シャルアさん？どうしたんですか？」

「今、王都全体に大量の魔物が、信じられないと思うけど……降ってきたの」

この世界についてあまり知らない僕は、大量の魔物が降ってくると言う事がどれだけ信じられない事かは分からないけど、それがどれだけ危ないかは何となく分かった。

「それで、姫様が部屋に居ないからとりあえず全員にどこに居るかを知っているか聞いて回っていたの。姫様、近衛隊を広間に集めているので来てください。キリヤマ君も」

シャルア隊長に僕とリリアは王城の広間に連れて行かれた。

第二十六話：コイスルオトメ（後書き）

次回は早く投稿します。

第二十七話：妖精へフェアリー（前書き）

はい、何かこの前のスランプが嘘のようにつきらすら書いてもう投稿できました

## 第二十七話：妖精へフェアリー

「姫様、良かった。城内にいたんですね」

リリアが広間に着くと、シャンさんが心配そうにリリアに駆け寄って行った。

「キリヤマ、お前も一緒だったのか」

「シード君、今どうなってるの？」

「町で魔物が暴れてる。兵や王族が今その討伐に当たっているけどかなりの犠牲が出るだろう……できるなら俺も出たいが……」

そう、僕らはリリアの近衛隊なのだ。リリアの護衛を一番に考えなければならぬ。だから、兵や王族の方々に任せるしか……え？

「王族？」

「ああ、そうかお前は知らないか。妖精フェアリーの中でも王族ハーモニクスの一体化は強力で、1軍位の力がある」

「そうなんだ」

そこで気付いた。

「リリアは？」

「あいつも出来るが、条件がそろわなければ後でかなりのダメージ



「あそこ！」

シャルアさんが出入り口を指差して言い全員が振り向いた。そこでは大量の魔物がこっちに向かって来ていた。その中には、口や爪から血をだらだらと流しているヤツもいた。

「シャン！姫様！奥へ逃げて」

ああ

「他は全員私の指示に従って」

あああああ

「あの数はかなりキツイわよ」

「うあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ！……！！！」

第二十七話・妖精へフェアリー〈後書き〉

今回からちょっとシリアスになっています。

第二十八話：暴走（前書き）

中々早く投稿できました。

## 第二十八話：暴走

「!?!」

気がつくのと、僕は血の海に立っていた。周りには魔物の血や肉が散らばっていて、目の前には………シャルアさんが倒れていた。

「僕が……?」

僕が殺<sup>や</sup>つたのか…

> s i d e リリア <

それは数分の出来事でした。

私は奥の方に下がって、怪我をしたシャンさんに治癒魔法を施していました。

「うああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

と、突然ユウタ君の叫び声が聞こえ振り向くと、ユウタ君が魔物の大群に向かって絶叫しながら突っ込んで行きました。

「ユウタ君!」

「キリ君!」

あんな数の魔物にたった1人で突っ込むなんて自殺行為です。そう

叫びかけた私は言葉を失いました。ユウタ君はたった1人で魔物を圧倒していたのです。火が魔物を焼き払い、風が魔物の身動きを封じ、雷が暴れ、水や氷がユウタ君を魔物から守っていました。でも、その顔はとても苦しそうでした。

そして、たった数分で全滅させてしまいました。

「キリヤマ君……あなた、何者なの？」

シャルアさんがユウタ君に近づいて尋ねました。ですが、それに対するユウタ君の返事はとても恐ろしいものでした。

「ゴフツ！？」

炎を纏ったユウタ君の拳が、シャルアさんのお腹に刺さったのです。シャルアさんはそのままバタリと倒れました。

「……！」

ユウタ君も自分で驚いていました。

「僕が……！？」

それだけ言ってユウタ君も倒れました。

> s i d e 裕 詫 <

「……………」

目が覚めると白い天井が見え、誰かが言い争っているのが聞こえた。僕はベッドに寝ていたみたいで、周りの様子はカーテンの様なものに遮られて見えない。

「だから姫様！彼はシャルア隊長を殺しかけたんですよ！！そんな危険な者と姫様を会わせるわけにはいきません！」

「ッ！ユウタ君は……ユウタ君は危険じゃありません！！絶対に私に危ないことをしたりしません！」

何となく、リリアとソルクさんだと思う。とりあえずベッドから降り、カーテンの様なものを開け、外に出た。

「ユウタ君！」

「ッッ！」

リリアが笑顔で駆け寄って来ようとして、ソルクさんに制された。だけどそれを押しのけてリリアが僕の所にやってくる。

(怖い)

「ユウタ君、大丈夫ですか？」

(来ないで！)

リリアがこっちへ近づいてくることにあの光景が鮮明に蘇ってくる。

「来ないで……！」

僕はリアを突き飛ばし、自分の部屋まで走った。誰かと会ったび、ぶつかるたびに、あの光景が蘇ってきて、怖くて無我夢中だった。自分の部屋に着くと、すぐにベッドに飛び込んで布団をかぶり、子供の様に泣いた。

第二十八話：暴走（後書き）

次回は投稿が少し遅くなります。

第二十九話：会議（前書き）

まあまあ早めに出来ました。

## 第二十九話：会議

「うう……ああ」

目が覚めた。泣いているうちに疲れて寝てしまったらしい。お腹が減っているけど、部屋を出る気にはなれない。誰かに会ったらまたあの恐怖が蘇りそうで怖いからだ。今は何時なんだろう？部屋が暗くてよくわからない。

そんな事を考えていると、不意にノックの音が聞こえた。

「誰……ですか？」

「私よ、キリヤマ君」

心臓が跳ね上がり、血が熱くなった。体が勝手に震えて、黙って布団に蹲っていたいと思うてしまう。

「入るわね」

暗かった部屋に廊下から光が差し込んだ。シャルアさんの姿が浮かび上がり、お腹の辺りに包帯がグルグルに巻いているのが見えた。でも、その顔は憎しみに歪んではいなく、むしろ僕のことを思いやるような優しい表情をしていた。でも、それが余計に僕を苦しめた。

「あ……あああ」

あの光景が誰に会った時よりも鮮明に蘇る。

「…朝食を持って来たから食べたいなら食べると良いわ」

「ごめんなさい」

「あなたは悪くないわ。ああなる事を予測しきれなかった私の失態よ。落ち着いたら私の部屋に来なさい」

何も、言えなかった。僕はあんな事をしたのに、シャルアさんは一つも僕を責めたりしなくて……でも僕がやった事が無くなる訳じゃなくて……。

僕は結局、朝食に手を付けられなかった。

> sideリリア<

ユウタ君が部屋に閉じこもってしまった直後の事です。

「彼は何者なんですか！国王様！？」

私は会議に出席していました。会議とは、この前の魔物の軍勢の襲来についてです。何とか魔物は全滅させる事ができたらしいですが、被害もかなり出たそうです。今は、それから発展してユウタ君について話しています。シャルマージ軍の元帥がお父様にもう講義をしていました。

「彼については、私も詳しいことは知らん」

「彼はバケモノですか！？30体を超える魔物の軍勢をたった1人で殲滅しただけでも非常識だと言うのに、4つの属性の魔法を使っ

たとも聞いています！そんなバケモノの事を何で国王様が知っておられないのですか!？」

……私はもう我慢できませんでした。普通、魔族が2属性までしか魔法を使えず、魔物の軍勢をたった1匹で倒すことが出来ない何て、どうでもいい!!

「ユウタ君はバケモノじゃありません!!!!!!」

全員が黙まり、私に目を向けて来ました。急に私が怒鳴ったので皆さん驚いたのでしょう。私は普段おとなしいので。

「えっと……その……」

「彼はバケモノではありません。列記とした私の部下であり、リリア様の近衛隊の1人です」

シャルアさんがフォローに入ってくれたので何とかその場はやり過ぎせました。

「でもよ、そいつが何者かは知っておきてくんだけどさ、親父」

「私は彼についてほとんど何も知らん、聞くならばリリアに聞きなさい」

兄様の話でみなさんの視線がこっちに向きました。説明しろ、とみなさんの目が言っています。

シャルアさん助けて〜、とアイコントクトを取りますがシャルアさんもこっちを見て、説明してオーラを出しています。

「彼は…ユウタ君は…人間です」

会議場全体に驚きが広がり、お父様に意見が飛び交います。

「国王様、彼を研究所へ搬送していいですか!？」

「いいえ国王様、ぜひ我が軍へ!」

「彼についてはリリアに任せている。その類の事はリリアに言いなさい」

またみなさんの視線が私に向き、私に意見を求めてきます。

「ユウタ君は何処へも行かせません。私の近衛隊です!」

「でもリリア様、彼はそこに居るシャルアさんを危うく殺しかけたと聞きます。しかも、そんな彼は拘束も何もされずに自分の部屋に居るとも聞きます。とりあえず、拘束をして見張りを付けた方がいいのではないのでしょうか?」

その意見に私は答えられませんでした。

でも、シャルアさんが代わりに答えてくれました。

「それは彼の精神状態を把握しきれなかった私の失態です。彼はパニック状態で、敵味方の区別がつかない状態でした。それに、彼は先ほどパニックになった状態でリリア様に出会っていますが手を上げたりはしていません。」

あと拘束に関しては、彼はたった1人で魔物の軍勢を殲滅させるほどの力を持っています。拘束をしようとして下手に刺激を与える方が、かえって危険だと私が判断し、自由にしています。」

完璧な説明でした。非の打ちどころがなさすぎて誰も反論できないほどに。

結局、ユウタ君については私に一任すると言う事でユウタ君についての話しは終わりました。

第二十九話：会議（後書き）

ユウタが立ち直るのはもう少し先だと思えます。

第三十話：救い（前書き）

ユウタにはまだちょっとへたれてもらいます。

### 第三十話：救い

(助けて……)

「何からなのかしら？」

何から…何だろう？シャルアさんから？あの魔物たちから？それとも……全部から？

と言っつかここは何処だろう？前にも来たことがあるような……

「ここは天界なんだけどね」

「自称…神」

「こんな時でも『自称』は欠かさないんだね」

辺りを見るとほわほわとした空間が無限に広がっている。確かにここは前にも来た天界（by自称神）だ。

「何の用？」

「君が助けてって言うから助けに来てあげたの」

助けについてどうするんだ？それが率直な感想だった。でも、少し落ち着いて考えると分かった。

「まさか、元の世界に戻してくれる！？」

「そう」

「やった！帰れる！！戻れる！！！」

その時、自称神は今までに見たことのない悲しそうな顔をしていた。でも、今はそんな事よりも帰れることが嬉しかった。

「ほんとに……いいの？」

「もちろん！」

自称神は少し考えてから言った。

「……じゃあ、あっちの世界で一番アナタを信頼している魔族に失望してもらって」

「え？」

何でそんなことをするのか、さっぱり分からなかった。でも、自称神が言うにそれはどうしても必要な事らしい。そして最後に自称神はこう言った。

「アナタがあの世界から消えて、あの世界の全員がアナタの事を忘れてもアナタの罪は消えないのよ……これだけは覚えておいて」

僕の意識は闇へと落ちていった。

「……………」

目が覚めた。でも、何と無くぼーっとしている。ああ、そうだ、もう2日も何も食べていなかったっけ。

…僕を一番信賴している魔族って誰だろう？

机を見ると、今日の朝ごはんが用意されていた。

「食べ……ようか…」

フォークと手に取り、ハムエッグのようなものに突き立て、口に運んだ。でも、口に入った瞬間に吐き気がして、結局食べることができなかった。

> side リリア <

「私は、どうしたらいいんでしょうか……？」

私は、1人きりの部屋で眩きました。ユウタ君はあれから2日も何も食べていません。あのままじゃ、死んでしまいそうで心配です。

「リリッチが何もしないなら。私が行ってくるわね」

いつの間にか部屋に入っていたサリーちゃんが言いました。と言うかここは王族とその世話役以外立ち入り禁止じゃなかったけ……

「行くなって何処に？」

「もちろんキリ君の所よ」

「そうですか。行ってください。私はまだ……どうすればいいのか

分かりません」

「そう…」

> sideユウタ<

「どうようか……」

とりあえず、誰かに会う事とご飯を食べることはできない。そうすると、かなりやれる事は絞られてくるけど……  
そんな事を考えていると、誰かが僕の部屋に入ってきた。

「誰……?」

「私よ」

「サリー」

サリーが部屋のドアを閉め、こっちへ近づいて来る。あの光景が目の前に蘇り、一歩近づくとたびに鮮明になっていく。

怖い

心から思った。きっと誰でもこうなるんだろうな、と思う。

「ゴメン……それ以上近づかないで。それ以上はもうダメなんだ」

「いつまでそうしている気なの?」

いつまで、いつまでだろう……。僕が、この世界を立ち去るまで……なのかな……

「（答えてよ…お願いだから）」

「え？」

「私……」

サリーは真っ赤な顔になって何かを言おうとしている。

「どうしたの？」

やがて意を決した様に拳を握り、叫んだ。

「私は……キリ君がいないと寂しいの!!」

「え、それって……」

「そうよ!!好きよ!!悪い!!?」

僕は、生まれて初めて女の子に告白された。

第三十話・救い（後書き）

はい、やってしまいました。次回はリリアが告るかもしれません。

### 第三十話：リリアの決意（前書き）

投稿が遅くなりました。次話は早めに投稿出来ると思います。

### 第三十話：リリアの決意

「だから……お願いだから………」

サリーが少しずつ近づいてくる。

ダメだ……怖い

「元のキリ君に……戻ってよ……」

ダメ……止めて……来ないで……怖いんだ

「来るなあ……！」

僕は、サリーを突き飛ばしてしまった。

そうじゃない……そんな事……したくない……

「……うう……ゴメンね……無理なこと……言ったりして」

違う……！そう叫びたかった。だけど、僕は何も言う事が出来なかった。

サリーは、泣きながら僕の部屋を出て行った。

> s i d e サリー <

私は、自分の部屋で泣いていた。

「ああ……ううう……」

私、振られたんだ……最後の1言はキツかったな……だって……来るなあ……！だもんね……私は近づく事すら出来ないんだね。

「サリーちゃん」

「リ……リツ、チ」

リリツチが私の部屋に入って来た。でも、涙を止める事が出来ない。

「私……も、その……ユウタ君に……気持ち伝えて来ます」

「私……は絶、対……応援……しないよ。だっ……て……、フラれて……も……私……は……っ、キリ君が好き……だから」

リリツチは、はい、とだけ言って私の部屋を出て行った。

> side シャルア <

「……どうする」

キリヤマ君、人間である彼は味方ならば物凄い戦力になってくれるだろう。だが、彼は心を閉ざしてしまった。私にはどうする事も出来ない。

出来るのであれば、サリーさんか姫様だけだろう。

「何故あの時……」

あの時、私が彼に殺されかけたりしなければ、彼はあそこまで心を閉ざしたりはしなかっただろう……

私が、キリヤマ君について考えていた時だった。突然私の部屋のドアが開かれ、シャンが駆け込んできた。

「隊長！大変です！！王都にまた魔物の軍勢が！」

「何ですって！！」

「しかも今回は進行速度が速くて、もう城に来てしまうそうです。兵も王族の方もその近衛隊も城下町の魔物の討伐に出払っていて、まともに戦えるのは近衛隊だけです。近衛隊でわたしたちどうにかするしか……」

私は魔法でその状態を確認し、愕然とした。数が多すぎて近衛隊では対処しきれない。

だから、私は最後の希望に縋りつく。

「彼は、キリヤマ君はどうなっている！？」

「ダメですよ……部屋から1歩も出ていなければ、食事すら取っていません」

「クソツ！リリア姫の近衛隊全員に通達！！唯一の出入りに全員集合！兵や王族が帰ってくるまでどうにかして持ちこたえるぞ！」

私は自分達の力と、わずかな確率のキセキを信じて出入り口に向かった。

> side リリア <

「姫様！」

「シヤンさん。どうしたんですか？そんなに慌てて」

私がユウタ君の部屋に行くために廊下を走っていると、シヤンさんが息を切らせて話しかけてきました。

「姫様！また魔物が王都にやってきました！近衛隊だけではこの城に入ってくるのを止めれるか分かりません！王室の方に避難してください！」

シヤンさんは私を王室の方へ連れて行こうとしました。でも、私はいけません。

「姫様？」

「ごめんなさいシヤンさん。私はユウタ君の所へ行ってきました。だから、シヤンさんは皆さんの援護に行つてあげてください」

シヤンさんは最初、信じられないものを見るように私を見ていましたが、やがて1回だけ頷いてから出入り口の方へ走って行きました。

### 第三十話：リリアの決意（後書き）

次こそリリアが告白します。そして、ユウタが復活するかも知れませんが。

第三十一話・立ち上がる勇氣(前書き)

ついに今回！ユウタが復活するのか！？

### 第三十一話：立ち上がる勇氣

「どうして……」

どうして、僕はこうなっちゃったんだろう。僕は……いなくなった方がいいのかな？僕を一番信頼している魔族に失望されて、この世界から……

「ユウタ君」

「リリア」

その時不意にドアが開いてリリアが部屋に入ってきた。そして、僕の手を取り隣に座った。不思議と、あの光景が蘇ることも、怖くて怖くて溜まらなくなることも無かった。

「ユウタ君、お願いです。また魔物の軍勢が王都に来て、この城にも来ています……みんなを助けてください」

「ダメだよ……僕は……一人で立ち上がる勇氣もない臆病者なんだ。だから僕なんか見捨ててよ……」

そう言いつつも僕はリリアの手を離さなかった。その手だけは、離せなかった。

リリアはそんな僕の手を握ったまま、言葉をかけてくれた。

「ユウタ君が一人で立てないなら、私が支えます。それに見捨てるなんてできませんよ。だって……私は……」

リリアは顔を真っ赤にして、僕の方を真っ直ぐに見て笑顔で言った。

「ユウタ君が大好きですから」

その笑顔に心臓がいつもの5倍のスピードで動いているような気分になった。

「ありがとう……それじゃ、行くうか」

「はい」

> side シャルア<

「くっ！」

状況は最悪だ。何しろ数が違いすぎる。ここが突破されてしまうのも時間の問題だろう。その間に兵たちや王族が帰ってくるのは、距離が離れすぎていてほぼ不可能だ。

どうする？

そんな事を考えながら戦っているとチャールの叫び声が聞こえた。

「シャルア後ろ！」

チラリと後ろを見ると鳥型の魔物が私に向かって飛んで来ていた。だが、そちらを撃退すると前にいる魔物の攻撃をうけてしまう。どちらの方がダメージが大きいかを考え、前方の魔物を撃退し、歯を食いしばった。

だが、来るはずの痛みは来なかった。

「？」

目を開き確認すると、そこには、心を閉ざしてしまったはずの人間の少年がいた。

> sideユウタ<

僕はリアと一体化して<sup>ハイモナイス</sup>城の出入り口に飛んできた。比喻じゃなくてホントに飛んできた。僕もリアも感情が高ぶっていて、能力が良く使えからだ。

「大丈夫ですか、シャルアさん？」

シャルアさんは最初驚いて声が出ないみたいだったが、少し微笑んで

「ありがとう」

と言った。

そして、僕は風力操作<sup>ウインドコントロール</sup>を使って魔物の軍勢に突っ込んだ。

「全員下がってください！」

「…分かったわ。全員下がって！」

シャルアさんの指示で全員がある程度下がったのを確認して僕は能力を<sup>プロミネンスコントロール</sup>に切り替え、一気に周りを焼き払った。

それで殆どの魔物を消し飛ばし能力を切り替え、ウィンドコントロール風力操作を使って竜巻を作って、残りの魔物を吹き飛ばした。

「これで、終わりかな」

魔物たちを全部倒し、僕はみんなの所に戻った。

「もう大丈夫なの？キリヤマ君」

「は………い」

安心したからか、僕は眠ってしまった。

### 第三十二話：答え

「やあ、少年」

目覚めるとそこは、またしてもあの天界（b y自称神）だった。自称神が少し嬉しそうな表情をしている。

「嘘でしょ？」

「ん？何かな？」

「あの世界から消えるためには、あの世界で僕を一番信頼している魔族に失望してもらわなければならない。なんて嘘でしょ？」

自称神はふふふと微笑んで、答えはしなかった。それはきっと背定なんだろう。

「それで、まだあの世界から去りたい？」

答えなんて分かり切っているくせに、自称神は僕に聞く。良いだろう答えるよ。

「僕はこの世界に残るよ。僕を好きだって言ってくれたのに僕は返事もしていないしね」

「そう、良かったわ」

自称神はそこで初めて笑った。ちょっと、カワイイなと思ったのは秘密だ。そして、僕の意識は闇に落ちて行った。

「う……うう」

頭がズキズキする。僕は病室のベッドに寝かされていたみたいだ。どれ位眠っていたんだろう？

「あら、起きたのねキリヤマ君」

「シャルアさん……」

「君、何も食べてないでしょ？何か食べて栄養を付けて、近衛隊に戻ってきてね。あと、姫様を幸せにしてあげてね」

「……はい？」

シャルアさんはそれだけ言って病室を出て行った。リリアを幸せに……つてどういう事だろう？まあ、後で考えよう。

見ると、ベッドの傍にある机に美味しそうなフルーツが置いてあった。この世界でもフルーツは僕の世界と同じらしい。僕はその中からミカンを選び、剥いて食べた。

「おっ……」

口に入れた途端、喉の奥がそのミカンを拒絶して、僕はミカンを吐きだしてしまった。誰かに会う事はリリアのおかげで大丈夫になっただけど食べものはまだダメみたいだ。……どうしようか、流石にそろそろヤバいんじゃないか……。そんな事を考えていると、病室に誰かが入ってきた。

「ユウタ……君」

「リリア」

リリアに見られてしまった。

まずい、リリアが心配する。僕にはそれが今まで以上に嫌だった。

「食べれ……ないんですか？」

「違う。ただこのミカンが口に合わなかったただけだよ」

「ホントですか？じゃあこれを食べてください」

リリアはフルーツの中からバナナを取り出し、僕に手渡した。僕は、それを振るえる手で口に運び、吐きだした。

「ゴメン」

「ユ、ウタ……君。ヤダ！死んだらヤダ！」

リリアは泣きながら僕に抱きついてきた。僕は、何も言う事が出来なかった。リリアはそのまましばらく泣き続けた。

「良い事思いつきました。ユウタ君、目を瞑ってください」

「う……うん」

僕は言われた通りに僕は目を瞑った。リリアは続けて言う。

「ユウタ君は…あの…その…私の事が好きですか？私は…好きです！」

僕は、リリアが好きなんだろうか？……いや、僕はもう知ってるはずだ。自分の気持ちを……

「僕も、リリアが……大好きだ！」

今、僕の顔は真っ赤だと思う。でも、これが僕の正直な気持ちだ。

「良かった」

突然、僕の唇み柔らかくて温かい感触がした。驚いて目を開けるとリリアが僕にキスをしていた。リリアの顔も真っ赤だけど僕の顔も真っ赤だろう。

そして、リリアの舌が僕の口の中に入って来て……って、ええ！そんな僕これでもファーストキスなんだけど！

続いて何かが僕の口の中に入って来た。それはリリアの舌に押されて僕の喉を通って行った。その後、リリアは唇を離れた。

「リリアあ？」

僕はパニックになって声が裏返ってしまった。

「食べれましたね」

でも、そんな事はリリアの笑顔を見ると何処かに吹き飛んでしまった。そして気がついた。リリアが僕の口に押し込んだのはミカンだったと。

「あの……ユウタ君、妖精<sup>フェアリー</sup>でのキスは愛し合う者達の誓いの証なんですよ」

そう言いながらリリアはまたミカンを口に銜え、僕にキスをした。

ちなみに、そのあと分かった事だけでも、僕はリリア以外に食べさせてもらう食べ物を食べる事ができなくて、それは別に口移しじやなくても大丈夫だった。

### 第三十二話：答え（後書き）

正直に言います。前半はもとから書く予定だったんですけど、後半は書くことが無くて困ったんです。

でも後悔はしていません。やっちゃった感MAXですがユウタとリアをラブラブにしたかったのも事実です。

**第三十三話・戦いの火蓋（前書き）**

今回ちょっと長めです。

### 第三十三話：戦いの火蓋

「おはよう、キリヤマ君」

「おはようございます。チャールさん」

僕が、何となく王城を散歩していると前の様にチャールさんに出会った。

「ふふふ、霧山君は今日のパーティはどうするんだい？」

「パーティ？」

「そう、王族主催のトルチ様の誕生パーティ」

「トルチ様？」

誰？何かのお偉いさん？

「リリア姫のお兄さん。つまりこの国の王子だよ」

「リリア、兄弟いたんだ」

「他に、姉も1人いるよ」

リリアのお兄さんとお姉さん……想像がつかない。と言っかその話は僕に関係があるのだろうか？

「そう言えば、何で僕にそれを言うんですか？」

「ん？近衛隊ほくゑいも参加するんだよ。前に集合した時………ってその時キミはいなかったか」

僕が部屋に閉じこもっていた時にあつた話は基本的に近衛隊の魔族たちは言わない。それは禁句になっているらしい。

「まあ、ちゃんとした服を用意しておきなよ」

そう言つてチャールさんは王城の外の方へ歩いて行つた。

「パーティ……あつ、そう言えば忘れてました」

「忘れてたんだ」

僕は今、自分の部屋で昼食を食べている。と言つたか食べさせてもらつている。理由は……みなさんしてるでしょ！恥ずかしいから言わせないで！

「リリアはどんな服着て行くの？」

「ドレスですよ。ユウタ君はどうしますか？」

僕は、あつちの世界では中学生だったのでスーツもタキシードも持つていない。だから結局は制服で出るしかないのだ。

「うん。これかな？」

リュックから制服を取り出し、当ててリリアに見せる。

「はい、カッコイイです」

「そう、ありがとう」

そしてパーティの時間。僕は隅っこの方で突っ立っていた。

何故かと言うと、リリアは来て速攻で貴族の方々に連れて行かれたからだ。美味しそうな料理を前にしても何も食べれないは辛いので、端っことでボーっとしていた。

「何やってるんの？キリ君」

「サリーこそ、何であっちの方に行かずにこっちに来たの？」

そう言うとサリーは、ちょっと周りを見て小声で言った。

「私はキリ君の事を諦めた訳じゃないのよ……」

「それって……」

「うん、まだキリ君の事が好きなのよ。だから一緒にいるために探してたの」

……どうしよう…凄く照れる。

「へへ、キリヤマ君モテるんだね」

「チャっ！チャールさん！？」

不意に後ろから声が掛かり振り向くと、そこには凄く笑顔のチャールさんがいた。

そして、何やら周りが騒がしくなり始めた。

「チャールさん、有名なんですか？チャールさんが来た途端に周りが騒がしくなってきましたよ」

「ははは、何言ってるんだい？人間君？」

何でチャールさんがそれを……

「何で僕がそれをつて顔してるね。教えてあげよう。キミが人間だつて事は実はもう国中に知れ渡っているんだよ。まあ、名前だけで顔は知られてないんだけど……で、僕がキミがキリヤマと言う名前だと言ったので、みなさんザワザワしてるんだよ」

「それつてバレてて良いんですか？」

「うん。キミが何かとんでもないことをしない限りは大丈夫じゃないかな？まあ、姫様とイチャイチャするのはここでは自重してね」

そう言つてチャールさんは何処かに去つていった。……何か、いつもそんな感じの役割の人だな

「ユウタ君。どうですかこのドレス？」

貴族さん達の中からリリアが僕の所に来て聞いた。リリアはデ○ニ

ーのシ〇デレラのようなドレスを着ている。答えはもちろん

「似合ってるよ。凄くカワイイ」

「ありがとうございます。でも……恥ずかしいですう」

リリアが顔を真っ赤にして照れる。そんな顔もカワイイとか思うのは僕がバカだからだろうか？

そんな僕らに青筋を立てて迫って来る魔族が1匹いた。

「君はリリアの何なんだ？」

その魔族は神話のユニコーンをそのまま擬人化した様な姿をしていた。ビシッとタキシードを着こなし、何か凄い威圧で僕を睨んでいる。

「はい？」

「だから、君はリリアの何だと聞いている」

「……………」

「（キリ君、そいつはリリッチの婿の最有力候補とか言われてる貴族、カッル・ピースよ）」

僕ら睨みあっている間にサリーが僕に教えてくれた。と言うかこういう態度のヤツはイラッとするし、リリアを呼び捨てにするのが何か気に入らなかった。

「僕はリリアの恋人ですが、何か？」

僕がそれを言った瞬間に会場中がざわめいた。

「リリア、それは本当か？」

それは、ほとんど脅しに近いものだった。

「……はい」

「こんな近衛隊の魔族だぞ！」

「……私はどう言ってくれても構いませんが、ユウタ君を侮辱するのは許しません！！」

リリアの叫びで会場の視線は全て僕らの方に集まった。

「僕はカッル・ブースだぞ！この歳で剣術の最高位を持つ天才だぞ！そんな僕を差し置いてこんな一魔族を選ぶのか！？」

「はい！」

「……お前、名前を名乗れ」

「霧山裕詫」

それで会場のざわめきがさらに増した。僕が人間だとこの国中に広まるだろつけどまあ良いや、もう名前はバレてるんだし。

「ははははは、お前が噂の人間か？見た目は割とまともなんだな？バケモノのくせにリリアに近づいてんじゃねえよ！俺と決闘しろ！」

二度と口の聞けないようにしてやる!」

プチッと来た。リリアを自分の私物の様に扱うその言い方と、禁句を言ったことにだ。

「黙れ。煩せえんだよ」

自分でもゾツとする声が出た。

「受けてやるその決闘。負けたらリリアを自分の物みたいに扱うその言い草を止める」

「ならお前が負けたらリリアの傍から消え失せる」

戦いの火ぶたは切って落とされた。

第三十三話：戦いの火蓋（後書き）

ちよつとどころじゃなくメチャクチャですね。でも、どうにかして戦わせたかったですよ。

おそらくこの戦い、スカッとはしますがカッコ良くはないです。

第三十四話：決闘（前書き）

だんだん書くことが無くなってきました。……前書きと後書きに  
!

### 第三十四話：決闘

僕は今、この前シャルアさんと決闘した闘技場にいる。ギャラリーの数は前とは比べ物にならない位多いけど。

「今更後悔しても遅いぞ」

「テメえこそな」

忘れた人のために言っておくと、僕はキレると口が悪くなる。ついでに言うときれてるので感情は高ぶっており、能力はフルで使えて結構強い。

「では決闘を始めます。両者前へ」

チャールさんの指示に従って僕とピースが3メートル位の間隔をあけて前に出た。そして、チャールさんが宣言する。

「始め！」

開始と同時にピースは剣を抜き、引きずりながら僕へ走ってくる。僕も鞘から柄だけの剣を抜き、水流操作アクアコントロールを使って柄の先に氷の剣を作り、向かって行く。

「くらえ！」

ピースが剣を地面から離し、剣を思い切り振るう。僕はそれを氷の剣で受け止め、能力を風力操作ウインドコントロールに切り替えた。能力でピースの横へ高速移動し、切りかかる。

ピースはそれを間一髪でかわし、一旦距離をとる。その時も剣を地面に引きずっていた。

「行くぞ！」

再び能力で高速接近し、切りかかる。が、またしてもピースは間一髪でかわして、剣を引きずりながら逃げた。

そんな事を何十回と続けているうちに、僕はピースを闘技場の端に追い込んだ。

「もう、逃げられないぞ」

「ああ、もう逃げる必要もないしな！」

そう言ってピースは持っていた剣を投げた。剣は僕の頭上を越え、闘技場のちょうど真ん中の辺りへ刺さった。そこで僕は気付いた。さっきまでピースが歩いた道が何かの形を描いていること。おそらく剣を引きずっていたのはこの形を描くためだろう。

「死ね。 舞踏剣界」

ピースがそう言った瞬間、闘技場の空中から大量の剣が現れた。その剣は重力のままに下に落ちてくる。

僕は能力を使って周りに気流を作り、落ちてくる剣を吹きとばした。ピースは指を少し動かして剣の軌道を変えた。全ての剣を遠隔操作出来るんだろう。

「クソッ！」

闘技場の狭い範囲で戦っているのは危険だと判断した僕は、能力を使

って空中に逃げた。が、ピースが指を動かすと剣達は四方八方から僕に襲いかかってきた。

前方からの剣を氷の剣で弾き、下から襲ってくる剣を後ろに下がって避ける。そのままの勢いで後ろに下がると剣が頬を掠めた。

「さっきまでの威勢はどうした!」

ピースが腕ごと手を振ると、全部の剣が全方向から襲ってきた。

「ユウタ君!!」

刹那リリアの叫び声を聞いた。

> sideリリア<

「ユウタ君!!」

名前は忘れましたが、剣術の強い方の魔法によって、ユウタ君に全方向から剣が襲って行きました。

ユウタ君の姿が見えなくなるほどの剣が刺さり、ポタポタと血が流れていました。周りもざわめいています。

「あ……ああ………イヤ…イヤ………イヤアアアアアア!!」

イヤだイヤだイヤだ。あれだけの剣が刺されば死んでしまう!イヤだ死んでほしくない!!死なないで!死なないで!!

私は周りの目も気にせず泣きだしました。

「大丈夫だよ。リリア」

その時、ユウタ君の聲がしました。私が顔を上げると、ユウタ君を  
剣が包んでいた剣の群れが吹き飛び、腕から血を流してはいました  
が、元気そうなユウタ君が現れました。

第三十四話：決闘（後書き）

はい、書くこと全然ないのでこれで×ます。

第三十五話：決着（前書き）

すみません。投稿遅いうえに短いです。

### 第三十五話：決着

「大丈夫だよ、リリア」

僕はそう言うと、能力を使って周りに群がる剣達を吹き飛ばした。実は、さっきは風の層を周りに展開して剣をギリギリ防いでいた。それでも、1本だけその層を突き破って僕の腕を掠めていったけど。

「……良かった…ほんとに……良かった」

リリアはそう呟いて座り込んでしまった。心配させてしまったんだなと思う。だから、こいつにはタツプリお返しをしてあげないと。

「チツ！くたばれば良かったものを…バケモノめ……」

こいつはもう2回も禁句を言ってしまった。よって、ぶっ潰す。

僕は風力操作を全開にし、僕に向かってくる剣を吹き飛ばしながら真っ直ぐにビースに向かう。ビース本体は魔法陣のために剣を手放していて、隙だらけだ。

「きゃっ！」

「待て！これ以上近づいたらリリアを切るぞ」

僕に剣が通じないと判断したビースが、剣の矛先をリリアに向けた。剣の先がリリアの首に当たって少し血が流れていた。

ナニシヤガッタコイツ

それで、僕の思考はストップし、意識が途切れた。ただ、コイツの事が許せなかったのだけは覚えている。

> sideリリア<

剣術の強い方の剣が私の首筋に剣を突き立て、ユウタ君が私を見た瞬間。ユウタ君の目つきが変わりました。怒りに燃えているとかそういう感じではなく、感情がスッポリ抜け落ちたようなそんな目をしていました。

「血……」

その言葉に私が自分の首筋を見ると、確かに血が流れていました。

「おい！動くなよ！！動いたら」

剣の強い方の声はそこで途切れました。何故かと言うと、その瞬間に氷漬けになったからです。良く見ると、ユウタ君の目には水の力を使うときの青い星が浮かんでいました。

「………終了」

「ユウタ君！」

「………」

審判が言うと同時に私はユウタ君のもとに行きました。ユウタ君はしばらくあの目のままボーっとしていましたが、やがていつものユ

ウタ君の目に戻りました。

「ッ！リリア！？何で！？決闘は！？」

「ユウタ君？まさか今のを覚えてないんですか？」

私は、さっきの出来事をユウタ君に話しました。その話をしていると、ユウタ君の顔はだんだん青ざめて行き、最後には少し震え始めました。

「…………ゴメン。ちょっと部屋に戻るよ」

そう言ってユウタ君はその場を離れて行きました。

第三十五話：決着（後書き）

作者の一人ごと

そろそろストーリー進行させようかな

第三十六話・心（前書き）

そろそろストーリーが進み始めます。

## 第三十六話：心

「リリッチ、キリ君はどう?」

「ダメです。何を言ってもドアを開けてくれませんでした」

ユウタ君の部屋の前にいると、サリーちゃんが話かけて来ました。サリーちゃんは元気が無いようです。

ユウタ君はパーティー会場から帰っていった後、カギを閉めて部屋に閉じこもってしまいました。私がいくら話しかけても返事もくれません。おそらく、決闘の時のアレが原因でしょう。

「これは何なんでしょう?」

「問題は治し方が分からないことね。前は周りの魔族が全て恐ろしいと思うようになってたから、リリッチっていう信じられる存在ができて治ったけど……」

「今回はおそらく、その信頼できる存在であるシャルマージが傷つけられた事による暴走。そしてその事への後悔ってことか」

気付くと、ガブリエル君もすぐ側にいました。

「どうしたら治るのかしら?」

「……俺の私見だが……アイツ、暴走は初めてじゃではないんじゃないか?」

「どづいづいことですか?」

「アイツ、ああ見えて意外とキレやすいだろ？ならあっちの世界でも何度かは暴走してると思うんだ。きつと、あっちの世界では止めてくれるヤツがいたんだろうが、この世界では違った。だから、またあの暴走を起こすのが怖い。そう思ってるんじゃないか？」

そんな事を私は考えもしませんでした。

ユウタ君は強い。だから、自分でその力を完全にコントロール出来ている。そう勝手に決め付けていました。

少し考えれば分かるのに……ユウタ君の力は感情で強さが変わる不安定な力。つまり誰か……いえ、私が支えてあげないと駄目だったんです。私がユウタ君を支えるって言ったのに……

「まあ今はどうしようもないし、キリ君が落ち着くまで待ちましょ」  
私達はとりあえず、ユウタ君を待つために大広間に向かいました。

> sideユウタ<

(リリア達は……もう行ったのかな？)

僕は、自分のベッドに蹲っていた。

能力、と言うよりも僕の心の暴走。はあっちの世界でも何回かあった。その時は僕よりも強かった友達が僕を止めてくれたから何とかなったけど、この世界では違う。僕が暴走すれば周りの魔族を傷つける。こんな不安定な心で誰かと会うのは危険だろう。

(僕は……どうしたらいいんだろう?)

最近僕は冗長不安定なんじゃないだろうか?と、半分以上本気で考えながら、僕はまた眠りに着いた。そうでもしないと空腹を紛らわせそうになかった。

> side???<

「大丈夫よね、君なら……そう信じてるわ」

誰もいない1きりの空間。周りを見渡しても何も見えないただ無の空間。そんな空間で謎の人物は呟いた。

「私のいとしい人……」

## 第三十六話：心（後書き）

今回謎のキャラを登場させてみました。このキャラは物語の重要な所を担ったり担わなかったりします。

### 第三十七話・条件（前書き）

お久しぶりです。投稿がこんなにも遅れてしまってますいません。それもこれもパソコンの野郎が壊れなければああああ………そうですね。はい、言い訳です。

### 第三十七話：条件

「で、具体的にどうするの?」

私たちは大広間で話していました。

「まあ、あの状態はそのうち治るだろう。だから、その後だ。そのあとアイツが暴走しないようにするにはどうしたら良い?」

「誰も傷つかない……じゃないですか?」

「そう、今回アイツがああなったのはシャルマージが人質に取られたからだ。アイツはそれが原因で暴走した。だからそうならないようにする。つまり簡単に言うと、俺たちが強くなる」

「そうね、リリッチは置いといて……確かに今のままじゃキリ君の足手まといね」

そのままガブリエル君とサリーちゃんは、どこかへ行ってしまいました。

………つて私は?

私が2人が行った方へ行こうとすると、机の上に1枚のメモが置いてあるのを見つけました。そして、そのメモには

『お前はキリヤマの側にいてやれ』

と、それだけ書いてありました。

「そつですね…」

私は、ユウタ君の部屋に向かいました。

そして、数週間の月日が流れた。

「おはよう、リリア」

「おはようございます、ユウタ君」

あの暴走の後、リリアと一緒にいてくれていたおかげだろうか、僕は予想より遥かに早く普段通りに戻ることができた。  
今も朝ごはんを普通に食べている。まあ、リリアに食べさせてもらっているのが普通って言うか分からないけど……まあ、この時間はリリアがすごくいい顔してるから何も言えないよね

「姫様！ここにいますか！……って何やってるんですか！！？」

突然僕の部屋に乱入してきたシャンさんが叫んだ。

うん、そうだよな。こんなバカップル見たいな事してたらそりゃ驚



とリリアを交互に見ている。

え？何故？

「どつしたんですか？シヤンさん？」

「どつどつしたって」

驚きすぎて呂律が回らないシヤンさんの代わりにリリアに聞こうとしたが、リリアも顔を真っ赤にしてブツブツ言っているだけで何も分からない。

「何で驚いているんですか？」

「えっと……その……言っつていい？姫様」

「はい」

リリアが顔をさらに赤く染めて言う。

いや、本当に何なの？

「実はその副作用をなくすことができるんだけどね、その条件が…  
フェアリー妖精がハーモナイズ一体化する相手に恋をしていることなの……しかもベタ惚れで」

自分で自分の顔が真っ赤になるのが分かる。顔が熱い。というか知らなかった。っていつから大丈夫だったっけ？

僕らはそのまま1分くらい硬直していた。

### 第三十七話：条件（後書き）

次回も投稿が遅れると思いますが、連載を休止したりはしませんし、最悪でも1ヶ月に一度は投稿しますのでよろしくお願いします。

第三十八話・奇襲（前書き）

お久しぶりです！ギリ1カ月以内に投稿できました。

### 第三十八話：奇襲

「……………ってそんな場合じゃない！」

たつぷり数分間硬直していた僕は、はっと気がついた。魔王の国の軍が攻めてきてるのにボーっとしてるんだ。

「リリア！」

「ひゃっ、はい！」

「「ハーモナイズ」」

手をつなぎ呪文を唱えた瞬間、激しい閃光が瞬き、次の瞬間にはリリアは隣にいなかった。

（リリア、成功？）

『はい、しっかりハーモナイズ一体化できています』

（じゃあ行くっ）

『はい！』

僕、いや僕らは、部屋を飛び出し廊下を駆け抜け城から飛んでいった。

いや、比喻とかじゃなくてウィントコントロール風力操作を使ってマジで飛んでいった。空から敵の軍を見渡し、本陣を探す。

(あれかな?)

『そう……みたいですな』

僕が見つけたのは軍のほぼ最後尾にあるぽっかり空いた場所だった。その中心では1人の大男が椅子に座って部隊長らしき魔族たちに指示を出している。

(どうする? 一旦引く?)

『いえ、1回奇襲を仕掛けて部隊長達を一掃してから引きましょう。そうすれば相手の指揮系統は混乱しますしそれに、中央の魔族は3大将の1匹、シード・ガリアス。普通に戦うのは危険です』

(分かった)

ウィンドコントロール  
風力操作を使って空を蹴り、高速で本陣に突っ込んだ。

「くくく!!」「くくく」

部隊長達が怯んだ隙に風の剣で吹き飛ばし、振り返りざまに大将を吹き飛ばそうとして、防がれた。僕が突っ込んで来て数秒しか経っていないと言うのにすばやく判断し、防御したのだろう。

「流石大しよ……」

僕の言葉が途切れたのは、大将をみてしまったからだ。その顔が、武器が、シード君とあまりにも似ていた。

『ユウタ君!!』

「わっ！」

リリアが叫ばなければ僕は真つ二つにされていただろう。僕は間一髪で大将の一閃を交わし、ワイントコントロール風力操作で空に逃げた。

『ユウタ君、引きましよう』

(……うん)

大将は飛べないようだし、周りの兵士達はあたふたするばかりなので、誰も僕を追ってくる事はなかった。

### 第三十八話：奇襲（後書き）

突然ですがもとの週一投稿で1000字前後の話を投稿するか、1、2日ごとに短い話を投稿するかどっちがいいですか？

### 第三十九話：大将

一旦城の前まで戻ってきた僕は、シャルアさんに大将についてを聞くようとして逆に質問された。

「キリヤマ君。どこに行ってたの？」

「え……敵の本陣です」

僕がそう言つと、シャルアさんは少しあっけにとられた様子だったがけれど、すぐに次の質問をしてきた。

「じゃあ、指揮官は見た？」

「え、シード・ガリアスっていう魔族らしいです」

「やはり……」

シャルアさんはそれつきり黙りこんでしまった。これでは質問出来ないの僕は立ち去ろうとしたが、シャルアさんに止められた。

「キリヤマ君、君は前線に出てくれない？無茶はできるだけしないようにして」

「あ、はい」

「あと、もし大将やそれ以外でも強敵が来たら、すぐに助けを呼んでね。すぐに誰かが助けに来てくれるから」

「はい！行つてきます！」

発動させっぱなしだった風力操作ウインドコントロールで空を駆け、高速で前線へと向かった。

そして、前線に着いた僕が見たのは地獄だった。

兵の死体がそこらじゅうに転がり、瀕死の仲間を気遣いもせずには戦いを続ける。その兵士たちだって無傷ではなく、血を流しながら戦っている兵士だって少なくなかった。

(ッー！)

『……これが、戦争です。これが今、この世界で起こっている悲劇です。これが、私達が止めようとしていたものです』

(うん、早く終わらせよう。ここも、世界も)

『はい』

僕は地上に降りず、そのままさっきの本陣に向かった。独断専行だけど、今はそんなこと構っている場合じゃないことはさっき分かった。

幸いにも本陣の場所は帰られておらず、僕はすぐに本陣を見つける事ができた。

(行くよ)

『待ってください。ユウタ君』

(何?)

『このまま行っても多勢に無勢です。この風の力で、敵を吹き飛ばしましょう』

(分かった)

周りの風を集めて凝縮し、目の前に風の塊を作った。そして、それを本陣にブン投げる。

風の塊は本陣の真上で爆発し、周りの兵士達を吹き飛ばした。敵を殺してしまうような威力はないから、周りの敵を吹き飛ばしたただけだ。

(今度こそ、行くよ)

『はい!』

まず、柄だけの剣の先に風を凝縮させて風の剣を作り次に、ウィンドコントロール風力操作ワイルドコントロールを使って高速接近した。

そのままの勢いで剣を振るい、大将の背中を狙う。だが大将は剣が当たる寸前に振り返り、そのまま大剣を振るった。その大剣は赤い光を纏っていて、風の剣をあっさり突き破って僕に向かってくる。

「お前が……人間か？」

僕は風力操作ウィンドコントロールで無理矢理体をねじらせ、大将の大剣を交わした。僕はすぐに柄の先に風を凝縮させて風の剣を作り、出来たのと同時に破裂させた。

空中にいた僕はモロに風を受け吹き飛ばす。それによって大将の一閃を間一髪で交わし、そのまま数メートル先の場所に着地した。

「お前は人間か？」

「…そうだ」

「……………」

大將が次の質問をしてこないのも、僕は聞きたかった事をきいてみる。

「もしかしてお前は……シード君、いや、シードガブリアスの……父親か？」

第三十九話：大将（後書き）

次は1週間後の投稿になると思います

第四十話：実力の差（前書き）

ギリ一週間で更新できました。

## 第四十話：実力の差

「ああ、そうだが……お前はあの裏切り者を知っているのか？」

「シード君は僕らの仲間だ」

「仲間……か。くだらんな、そんなものでは…何も救えはしない！  
」

大将が大剣を後ろに構えた。そして、あの赤いオーラを放出した高速移動で、僕に接近する。僕は能力を水流操作アクアコントロールに切り替え、柄だけ  
の剣に氷の刃を作り、応戦する。

だが、大将の一閃は氷の刃を突き抜け、僕の頭を真っ直ぐに狙う。

「つぶな！」

頭を下げて大剣をかわし横に転がる。そのままだと、大将のタックルをくらってしまうからだ。だが、大将は、左足を軸に回転し追撃をしてくる。

何とか氷の壁を作り攻撃を防ごうとするが、壁は難なく突き破られ、大剣が僕の脇腹に直撃した。

「ツツツ！」

激痛が脇腹を襲い、僕は数メートルも吹き飛ばされた。

僕が今、リリアと一体化してハイモナイス肉体強化をしていなかったら、確実に致命傷だっただろう。

（何か、おかしかった）

さっきの氷の刃といい、氷の壁といい、大剣で叩き斬られたような感じではなかった。何か、もっと自然に……

『熱、じゃないですか？』

(え?)

『あの赤いオーラからは、熱が発せられている。それなら、全部説明がつくと思います』

(そうか、なるほど)

そう言えば大剣で切られたのに、僕の脇腹からは全然血が流れていなかった。焼いて傷を塞いでいたのだ。それに、激痛に誤魔化されて分からなかったけれど、僕の脇腹はかなり熱くなっていた。

「なら、こっする!!」

僕は能力を風力操作ウインドコントロールに切り替え、大将の上空に飛んだ。そして、ここで大きめの竜巻を作り、それを投げつける。

つまりは、氷で攻撃をしなければ良い。さらに大将は飛べないみたいだったから、空中は安全地帯だ。

「その程度か!!?」

大将は大剣にさっきの何倍もオーラを纏わせ、竜巻を真っ向から切り裂いた。そして、そのオーラは飛び道具となって僕に襲いかかる。僕はそれを前進してかわし、さらに追撃を銜えるために後ろを振り向いた瞬間。

「その程度かと聞いている」

大将がオーラを放出し、僕の眼前に現れた。

「ツツ！」

僕は間一髪でウィンドコントロール風力操作を使って後ろに飛び退き、大将の回転切りをかわした。そして、能力をエレキコントロール電撃操作切り替え、攻撃をして隙の出来た大将に電撃を放つ。

だが、大将の攻撃は終わっていない。オーラを放って僕に接近し、もう一度回転ギリを放とうとしていたのだ。

（ダメだ！切り替えが間に合わない！！）

能力を切り替える隙が無かった。たぶん大将もそれを狙ったのだろう。その大剣は僕の頭をしっかりと狙っていた。

（くそっ！）

だが、大将の大剣は僕の頭を切り裂くことはなく空を切った。

大将の大剣が僕にあたる寸前に背中に殴られたような痛みが広がり、僕が地面に落とされたのだ。

僕は知っている。距離を無視して殴る事が出来るこの魔法を。それを使う仲間を。

「ありがとう、サリー」

僕が立ちあがると、サリーとシード君の背中が見えた。

「そんなのはいいから。いくよキリ君」

「このクソ親父を……ぶっ倒すぞ」

「分かった！」

## 第四十一話：新たな力

「俺がまず突っ込んで隙を作る。その隙にお前たちがヤツをたたけ」

「分かった」

「OKよ」

まず、シード君がオーラを放出する高速移動で大将に向かって突っ込んでいく。そして、勢いを利用して回転切りを放った。大将はそれを大剣で防ぎ、オーラを放出して上空に飛んだ。

飛んだ瞬間にサリーの杖の攻撃で叩いたが、読まれていたようで、打撃を切り裂かれた。だが、その隙に僕が風力操作ウインドコントロールを使って高速移動で接近し、その勢いで腹を殴った。

「ッガ！」

「くらえ」

僕が殴って大将が怯んだ一瞬に、シード君がオーラの放出で大将に迫った。そして、大剣を振るう。僕はそれに巻き込まれないように地面に回避する。

ガン！とシード君と大将の大剣がぶつかり合った。

そして、2人の剣が離れた瞬間に2人共逆方向からオーラを放出した回転をし、またぶつかり合う。だが、大将の大剣がシード君の大剣を弾いた。

「シード君！！」

大剣を弾かれてがら空きになったシード君の肩から腰まで、大将の一閃が走った。ボタボタと血が流れ、僕の頬にも数滴落ちる。落ちてくるシード君をキャッチし、高速移動で大将から離れた。

「シード君！シード君！！」

「う……あ……キリヤマ。俺は良い、早くアイツをぶっ殺して来い」

「そんな事よりシード……」

「隙だらけだぞ、人間」

「……」

いつの間にか僕の真後ろに迫っていた大将が、僕に大剣を振り下ろす。サリーは不意を突かれていたようで、動けない。そして、僕も防御が間に合わない。

ザン

鈍い音がし、腕が宙を舞った。だけどそれは僕のではない。僕を突き飛ばして、そのまま切られたシード君のだ。

シード君は動かない。一瞬、死んでしまったのかと思ったけれど、気絶しているだけみたいだ。でも、さっきの傷に加えて腕からも出血して、命にかかわる事態である事は素人の僕でもわかる。

「シー君……」

「何で……」

「？」

「何でこんなことができるんだ！！！！？」

「これは裏切り者だ。殺すのは当たり前だ」

「アンタの……子供だろ！！自分の子どもなんだろ！！？」

「だから、どうした？」

許せない。こいつだけは絶対に許せない。そう、素直に思った。

『ユウタ……君』

僕は立ち上がり、宣言する。

「シード・ガリアス。僕はお前を、ブツ倒す」

そう言った瞬間、僕の中に力が溢れてきた。僕はこの感覚を知っている。これは、能力の覚醒だ。

「行くぞ！」

大将がオーラの放出を使って僕に高速接近し、僕に向かって横なぎを振るう。

僕は右手を上げ、振り下ろす。するとそれだけで、大将の大剣が真っ二つに割れた。

「！！！」

「くられ!!」

僕は右足を強く踏み出し、拳を握りしめた。そして、思い切り顔面に向かつて放つ。

一体化ハモナイスによって強化された拳によって、大将は吹っ飛んだ。

「……人間よ、お前は私を本気にさせたみたいだな」

言い終わると同時、大将の体が巨大化し、赤い竜になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0404k/>

---

a person with preternatural power in the magic world ~ ~ 超能力者魔法の世

2011年3月19日21時47分発行